



帰ってきたヒトラー

第二次世界大戦の元凶ともいえるヒトラーが、現代のベルリンに、白い煙とともにワープしてきた。ヒトラーは軍服のまま街を歩き、彼が本物と知りうるはずのない市民たちと遭遇し、様々なギャップで観客を笑わせる。

TV局をクビになったディレクターが、面白芸人として彼と二人で、ドイツ国内を車で移動しながら、その行状言動を撮影しネットに公開する。このシーンはドキュメンタリーらしいが、年配のドイツ人の本音も聞けるきわどいところ。ヒトラーは市民らと意気投合し、怪しい人物として護身用催涙スプレーを顔面につけられ、極右の若者たちと話し、極右政党本部に乗り込み党首と討論し、論破する。ここなどは国に対する本気度、凄み、政治家の格の違いを見せつけ、筆者などは観ているうちにヒトラーに人間的魅力を感じ、劇中の彼にエールを送ってしまう。自分をヤバイなと感じ背筋が寒くなりながらも笑ってしまう。

現代は怪物を生んだ時代と酷似

TV局の女性部長は、ヒトラーを局の様々な番組に出演させ、視聴率上昇の賭けにでる。番組は非難を受けるどころか、視聴者たちに受け、笑いをとり彼は拍手喝采TVの人気者にのし上がっていく。しかし、ヒトラーは動物虐待をネット上に流され、一気に人々からボイコットされ、女性部長もクビ。しかし、めげる男ではない。ヒトラーは自伝を書き、ディレクターが監督し、映画化。再起する。

この映画が面白いのは、現代が怪物ヒトラーを生んだ時代背景に酷似していること、すなわち市民が格差や社会に不満をもち、移民を排斥し、政治家も大衆に迎合し、先進各国が自国中心、排他的(トランプ氏が過激な発言で共和党の米大統領候補として人々を魅了する)だ。またブラックで毒のある強烈な社会風刺にあり、それを見無責任に笑って観ていられることだ。蘇ったヒトラーが、本物だ!と見抜いたディレクターの末路が、実に暗示的だ。(絵と文・山下雄平)

シネマ気球

第36号 200円

シネマ気球©

編集兼発行人 関田孝正
〒270-0107
千葉県流山市西深井339-2
TEL 0471531533
FAX 0471567122

私の好きな 英国作品と俳優

岩館範子

息子の才能に気づいた父はビリーの夢をかなえるために一大決心をする・・・。

ビリーのまじめな顔と笑顔のギャップがいい。ビリーを好きな友だちのマイケルが上手い。姉のワンピースを着ても、かわいい。難しい役なのに完璧。

炭鉱ものの作品は、他に『ブラス!』がある。最近では、『パレードへようこそ』がよかった。

『パレードへようこそ』(2014年)

〈ストーリー〉1984年、サッチャー政権下のイギリス。ロンドンに住む1人の青年のアイデアで、炭鉱労働者たちのストライキに心を動かされ、支援するため仲間たちと募金活動を開始した。全国炭鉱労働組合に何度電話しても、寄付の申し出は拒否される。理由は彼らがゲイだから。勘違いから始まって唯一受け入れてくれる炭鉱が現れる。寄付金のお礼にと招待された彼らは、ミニバスに乗ってウェルズの奥地の炭鉱町へとくだすのだが・・・。

最初町の人たちの反応は冷やかで、どうなることかと思っただが、皆好奇心を押え切れず質問することから始まり、心を開き始める。

そこから交流も始まり、ウェルズの人たちがロンドンに来たりもする。すんなりとはいかないけど、新たな人生をつかみ取っていくという実話を映画化。ビル・ナイ、イメルダ・スタウトン、アンドリュー・スコットなどが出演。ゲイ・レズビアン映画と言われるが、確かにでてるけど、一般人もやらないことをやってくれた。炭鉱ものに入れて欲しい。

『父の祈りを』(1993年)

〈ストーリー〉1974年、英国ギルフォード。1軒のパブが爆破される。容疑者はアイルランドからやってきたジェリー・コンロン(ダニエル・デイル・リス)たち若者4人。テロ防止法が施行され、英国とIRAの争いが激化していた。英国警察は4人を実行犯と断定。ジェリーの父ジュゼッペ(ピート・ポスルスウェイト)や叔母の家族たちも、テロの協力者として逮捕されてしまう。英国の司法制度を根底から揺るがした冤罪事件「ギルフォード・フォー事件」を題材としたドラマ。

ダニエル・デイル・リスは『眺めのいい部屋』や『エイジ・オブ・イノセンス』で地味めの役をやっているが、私の場合はこの作品

で注目することになった。その後の活躍はみんな知っているだろう。最近では、ベネディクト・カンバーバッチがいる。彼は映画では『裏切りのサーカス』に出演。

『裏切りのサーカス』(2011年)

〈ストーリー〉東西冷戦下、英国情報局秘密情報部(MI6)とソ連国家保安委員会(KGB)は、熾烈な情報戦を繰り広げていた。英国情報部(サーカス)の中に、ソ連の二重スパイ(もぐら)がいるとの情報を得る。コードネームティンカー、テイラー、ソルジャー、プアマンが疑われる。チーフのコントロール(ジョン・ハート)は作戦失敗により、サーカスを追われ、謎の死を遂げる。コントロールの右腕で引退したスマイリー(デイリー・オールドマン)が調査を始める。裏切り者の正体は・・・。

オールドマンはもちろん良い。カンバーバッチはスマイリーと共にもぐらの情報を集めるギラム役である。金髪でゲイのキャラクターを上手く演じている。この作品には、トム・ハーディも出演している。ギラムの下で働くター役。コリン・ファース、トビー・ジョ

いま巷では、英国男子が人気である。一番に思い浮かぶのは、『リトル・ダンサー』かな。
『リトル・ダンサー』(2000年)
〈ストーリー〉イングランド北部の炭鉱町で暮らす11歳のビリー(ジェイミー・ベル)は、強い男になって欲しいと願う父(デイリー・リス)の勧めでボクシング教室に通っていた。ある日クラシック・バレエに興味を持ったビリーは父に内緒でバレエを習うようになる。彼の素質を見抜いたウィルキンソン夫人(ジュリー・ウォルターズ)の支えでめきめき上達。

ーンズ、マーク・ストロングも出演しているのに、ハーディはちやんと印象に残っている。その後『欲望のヴァージニア』や『ダークナイト・ライジング』『チャイルド44 森に消えた子供たち』『マッドマックス/怒りのデスロード』などに出演、『レヴェナント/蘇りし者』では、レオナルド・デイカプリオと共演した。忘れてた、2人共2010年『インセプション』にも出演。レオとは既に共演して

る。次回作には『レジェンド』双子の実在した伝説のギャングスター、レジーとロンを1人2役で演じる。楽しみ。

カンバーバッチは、他に『イミテーションゲーム エグニマと天才数学者の秘密』などに出演しているが、何と言ってもBBCのテレビシリーズ、シャーロック・ホームズの現代版『シャーロック』が面白い。今どき、ホームズがいたらこうだろうと思わせてくれる。1番のはまり役だと思う。相棒のワトソンはマーティン・フリーマン。『ホビット』シリーズで有名になったが、たくさんの作品に出演している。売れっ子になってしまったが、だいぶ前の『銀河ヒッチハイク・ガイド』がおもしろい。

『銀河ヒッチハイク・ガイド』(2005年)

〈ストーリー〉ある日、突如として上空に現れた巨大宇宙船。ヴォゴン人建設船団と名乗る彼らの目的は、地球爆破。一方的な予告の後、地球の歴史は幕を閉じる。最後の地球人となった平凡な英国人アーサー(マーティン・フリーマン)は、異星人である事が発覚した友人フォード(モス・デフ)と共に、宇宙で生き抜くサバイバル術とクールな風刺に満ちた銀河最大のベストセラー〈銀河ヒッチハイク・ガイド〉を頼りに前途多難な旅へと飛び出す事に・・・

銀河系大統領ゼイフォード役のサム・ロックウェルも好き。大統領選で敗れたハーマ・カヴァーは、ジョン・マルコビッチ。相変わらぬの怪演ぶり。下半身は、触手みたいな金属製の足が10本くらいいてる。結局最後には、地球は爆破前の状態に戻る。

くれる。全く違うキャラクターの『オンリー・ラヴァーズ・レフト・アライヴ』もいい。

『オンリー・ラヴァーズ・レフト・アライヴ』(2013年)

〈ストーリー〉吸血鬼のアダム(ヒドルストン)はギターをはじめ、弦楽器なら何でも自在に弾きこなすミュージシャンとして、アンダーグラウンド・ミュージック・シーンで活躍している。しかし、近年の自己破滅的な人間的振るまいに抑うつを抱えていた。そんな時、恋人イヴ(ティルダ・スウィントン)がデトロイトの彼の元を訪れる。彼女も吸血鬼で、2人は何世紀も愛し合い、生き続けてきた。久々の再開もつかの間、イヴの破天荒な妹エヴァ(ミア・ワシコウスカ)が会いにやってくる。3人の運命はゆっくりと変わり始める。

ヒドルストンの自滅的でロマンチストの吸血鬼がいい。長く生きていても悩み、考えすぎ時間を無駄にしているとイヴに言われる。ヴァンパイアものは好きだし、人間から血を吸わない、このエレガントな美しい吸血気作品が好きになった。

あと好きな作品は、『パイレーツ

・ロック』。全編にロックが流れていて盛り上げてくれる。

『パイレーツ・ロック』(2009年)

〈ストーリー〉ポップス放送が制限されていた60年代英国で、船の上から24時間ロックを流す海賊ラジオ局があった! 高校を中退になったカールは更生のため、名付け親で母の旧友でもあるクエンティン(ビル・ナイ)の船に預けられる。その船こそ、海賊ラジオ局「ラジオ・ロック」。過激なDJやロックはイギリスの人口の半数以上を夢中にさせていた。楽しい日々は長くは続かない。頭のカタイ役人が海賊ラジオ局を取り締まるうとしていた。

他にフィリップ・シーモア・ホフマン、リス・エヴァンス、ニック・フロスト、クリス・オダウドが出演。エヴァンスはアメリカに渡るのが戻ってくる伝説のDJ。笑わせてくれる。頭のカタイ役人は、ケネス・ブラナー。何とかしてツブそうと仕かけてくる。結局ラジオ・ロックはなくなってしまうけど楽しませてくれる。

お気に入りの英国作品や俳優探しは続く。

シネマギャラリー 14

鶴田 聖



〔描き手からの蛇足〕スペクタクル映画イコールセシル・B・デミルではあまりにも能天気過ぎるので、僕としては珍しく、助言を参考にしてまとめたのが今回のイラストです。協力いただいた杉田夫妻と浅井氏(三人とも大学時代の後輩に当たる)に感謝。期待にそえるイラストとはとても言えないのが残念ですが、今の僕に出来るのはこれくらいのことなのだなあ。

取り上げた作品=キング・コング/風と共に去りぬ/アラビアのロレンス/十戒/ベン・ハー/史上最大の作戦/サムソンとデリラ/ロード・オブ・ザ・リング

<ネタバレ感想!> 果たして、J.J.は ルーカスとディズニーの 呪縛に屈したのか?

『スター・ウォーズ フォースの覚醒』

門馬徳行

多少の不安と大いなる期待を抱いた『スター・ウォーズ(以下、SW) フォースの覚醒』エピソード(以下EP) 7が昨年5月4日に公開された。端的に言うところ、あのJ・J・エイブラムス(以下JJ)が、生みの親ジョージ・ルーカスとディズニー・パワー(家族路線)の呪縛をどう解き放そうとしたのか、さらにJJ独自の新しいSWの世界をどう創りえたかという点が見どころではなかったかと思う。

物語は、EP1〜6とリンクしていて、大胆な変革はなく前シリーズをリスpektしながら話を進

めていた。帝国軍VS反乱同盟軍の戦いというスタンス、ハン・ソロとレイアの再会、ジェダイ騎士の復活とか、とくに真新しい展開ではないが、JJは旧作(ルーカスの世界)から、つかずはなれずに新SWの基本路線をうまくまとめたな、というのが第一印象。今までのファンに眼を配りながらもSW次世代が活躍する物語にするというビジョンはまず達成されたと思われる。さらに、かつて銀河を救ったルーク・スカイウォーカーを敵味方とも探し求めるという展開になっていて、やはり話のキーマンはジェダイの騎士であり、そこはきっちり押えていた。それらの中で、なにやら気になった点がいくつかあったので触れてみることにしたい。

〈ヒロインの誕生〉

まず一番の特徴は、主人公が女性レイになったこと。これは、これからの人類を救うのは男性ではなく女性の手に握られているということだろう。常に、ヒロインが活躍する宮崎アニメに共通するテーマでもある。宮崎も好戦的な男たちには何も期待してないのだろう。しかし、これは別に目新しい変換ではない。すでに『エイリアン』(1979)の主人公でさえ男性から女性に代えられていた。この時既に女性時代到来の予感が語られていたのだ。このヒロイン、レイを演じたディジー・リドリリーが颯爽としてアクティブだった。そして、邪悪な剣士キャプテン・ファズマにしても最初は男性のキヤラだったのが、女性に変えられている。彼女らは男と対等の立場で戦うことになる。フォースの力に覚醒したレイの今後が俄然楽しみになりそう。さらに共に戦う相棒の黒人フィン(ジョン・ボイエガ)も脱走兵という履歴を持っている。彼はもともとストームトルーパーだったが、正義に目覚め寝返ったという設定になっている。さらにファースト・オーダー側に寝返った選ばれし者、カイロ・レン(アダム・ドライバー)もいる。寝返り、裏切りは戦国時代の十八番だが、SWでも描かれていることがかなり面白い。このカイロ・レンがおそらく第二のダース・ベイダーになっていくのだろう。が、初代ベイダーに比べ小物感が付きまとう。ヘルメットを簡単に取ってしまう(ベイダーは決して外そうとはしなかった。これはルーカスのこだわり、呪縛ではな

いか。JJはいとも簡単にレンの素顔を見せる)、どつしりとした圧迫感が薄い。そこが課題ではなかろうか。

〈父親殺し〉

2番目のポイント、JJが新3部作の1作目で、SWの核心というべき〈父親殺し〉を描いてしまったという点。まさか、こんなに早くハン・ソロ(ハリソン・フォード)を死なせてしまうとは思わなかった。やりおったな! JJ。

時として父親が自分の敵になることや、自分の中に流れる同じ血を否定しなくてはいけない時があるだろう。この親子の確執にルーカスは時間をかけたが、JJはこだわらず早急に描いた。親を抹殺するにはそれなりの憎悪や要因がなければならぬだろう。これは、呆気なく父を倒したレンの葛藤は以下EP8〜9で描いてくれということなのか(JJの演出は今回だけ)。果たして、自分の父親を抹殺したレンは、このまま坂道を下るようにダークサイドへ堕ちて行くのだろうか。しかしながら、この時点において以前、反乱軍を救ったソロが命を落としてしまうとは、やや納得できない。それは、SWにとってのハン・ソロは不滅

のヒーローからだ。もともとSWは何でもありの世界、夢の世界、だからヒーローはあくまで不滅と信じたい。マーケティング優先のデイズニーにとっても、熱い人気のあるソロを死なせてしまつては観客動員数に響いてしまう。そこで強引に裏読みすれば、デイズニーは次作以降にソロを生還させるかもしれない。そこは一観客として望むところだが、JJはあえてそんなデイズニーの呪縛に一矢を放ったのかもしれない。そしてソロの後継者としてちゃんと新キャラのエース・パイロット、ポー・ダメロン(オスカー・アイザック)を配しているという指摘もある。

〈謎・謎・謎〉

3番目は、新シリーズは3部作(EP7〜9)で構成されていることだ。そのせいもあり今回、解明されていない謎がやたら多い。私たちはこれから、その謎がきちんと解明されるのかどうかを見極める必要がある。つまり、完結編終了時まで作品の評価はできないことになる。このことは、モヤモヤ感が残る私たちの気持ち、引っ張っていかうとするあざとい企業戦略を感じてしまう。JJはTVドラマを制作しているせい、謎の

小出しを連発して観る側の気持ちをつかんでいくのが上手い。連続ドラマでは、ファースト・シーズンが終わると(実は話は終わってなくいくつかの謎は解明されないまま結末へ。また新しい話の予感で終わる)、すぐセカンド・シーズンへ移っていく。つまり延々とドラマは続くのだ。観る者は、結末めがけて鑑賞してるわけだが常にはぐらかされる。正直に言うところは、たまらない。まさにメビウスの輪なのだ。

レイの待つ家族とは、ダークサイドの最高指導者スノークの正体とは(ホログラムだけの出番では弱い)、カイロ・レンの過去は、ルークはなぜ姿を隠し、また現したのか、なぜレイもフィンもいとも簡単にライトセーバーを使うことができたのか、謎が謎を呼び、また私たちは映画館に向かわねばならない。悔しいが、まんまとJJの戦略にはまってしまったのだ。つまり、SWは永遠に続いていくのだろう。

映画化の権利がデイズニーへ移った時点で、家族中心の話になることは予測できていた。みんなで見れる(毒が少ない)デイズニー映画」というキャッチフレーズ。

JJはルーカスばかりでなくデイズニーの呪縛とも戦わなければならなかった。そのせいか、カイロ・レンは極悪のワルにはなれなかった。ここは作劇上、冷酷で残忍なキャラが必然だったと思う。キヤプテン・ファズマだつてもっと卑劣な感じが出たはずだ。が、家族路線では当然限界がある。グロテスクなシーンや超ワルは出せないだろう。子供たちを怖がらせてはいけなからだ。世の中には越えてはいけなからだ。ボーダー・ラインがあるのだ。

スターキラー攻撃シーンも意外とあつさりしている。ここはもつと時間をかけてほしかった。悪戦苦闘してほしかった。ダメロンの活躍だけでの勝利では芸がないだろう。ダメロンは最初の方で殺されてしまう予定だったが、ミーティングで変更したそう。これは成功している。最後、やつと姿を現したルークは何も言わないまま映画は終わってしまう。JJの演出はこの作品だけで、EP8〜9は他の監督が撮ることになっている。どんな経緯があつたか知らないが、出来れば、すべて彼に演出してほしかった(彼は、監督を譲るんじゃないかと言つてたら

しいが、もう遅い)。連作は彼の得意とするところだからだ。でないとJJの本音がわからないではないか。彼がルーカスとデイズニーの呪縛から逃れたかどうかは、まだ見えてこない。少なくともその志はあつたと思いたい。決められた枠の中で格闘したと思いたい。ここはひとつ、2017・12・15公開のEP8を待つしかないのではないか。

なつかしいミレニアム・ファルコンとTIEファイターの空中戦は見応えがあつた。チューバッカ、C-3PO、R2D2の姿が見れるだけでも楽しい。新しいBB-8の動きもスピーディだった。だが、懐かしさや楽しさだけで終わっていいのであろうか。いや、それらを突き抜けた心躍る世界を観たいと思わないか。登場人物と一体化し泣いたり喜んだり怒ったり叫んだりする世界を観たいと思わないか。それが究極のS・Wの世界ではないか。この作品だけで『新SW』が成立しえたのかどうかの結論は出せない。これからの2部作が、キリスト教的神話を土台にしたという『旧SW』の世界をどう打ち破り、新しい神話&伝説&世界をいかにして構築していく

“犬” 作品を見て

里中智子

一緒にいても声なきものの声に耳を傾ける時間をどれだけ持てているだろうか。

世の中は空前の猫ブームとかで、猫の飼育頭数が犬を超えそうだと話題になっている。このブームの中、なぜ猫を飼うのかという問いに、犬よりも手間がかからないからと答える人がある。軽い気持ちで飼い始め、飽きたり面倒になっ

のかを注意深く見届ける必要がある。神話(あるいは聖書)をもとにしている以上、これは神と悪魔の戦い。さらに言えば、正義と悪の戦いのだ。この構図はそのままSWの世界に当てはまってしまふ。帝国軍Ⅱ悪魔(サタン)Ⅱ悪

反乱軍Ⅱ神(ゴッド)Ⅱ善の公式が読み取れる。おのずからジェダイの騎士たちは正義の味方になる。彼らは善にも悪にもなりえる諸刃の剣Ⅱフォース(ライトセイバー)を正しく使わなければならない。そして、なんとしても宇宙の平和

たりすれば安易な気持ちで捨ててしまうことにつながりはしないだろうか。飼い主の身勝手な行動が、どれだけペットを苦しめるのか認識もせず命を平気で捨てているのだ。ペットは、飼い主を失えば生きていけない。そんなことがわからない人にペットの命を預かる資格はない。猫ブームの陰で捨てられる猫が増えなければよいのだけれど、心配なのは捨てることへの罪悪感が犬より薄いような気がするのだ。野良猫になっても誰かが餌をくれると自分で自分に言い訳をして罪の意識を薄れさせようとしている人がいるのではないか。飼い主はなかったこととして忘れてしまえばいいのだろうか、捨てられたものたちは信頼していた飼い主のことを決して忘れない。

「犬に名前がつく日」は、犬にとって新しい生活が始まる輝かしい日であり、飼い主にとっては大きな責任を負う日なのだと思う。生きものを飼うことは、楽しいことや嬉しいことばかりではない。病気になるればお金がかかるし、疲れて帰宅してもいつもと変わらず面倒をみなければならぬ。家族の一員という思いをどんな時でも変わらず持ち続けるのは困難だ。人は割に合わないことがあっても自分の気持ちと折り合いをつけながら日々を重ねていくけれども、彼らの気持ちは真直ぐで迷いがないから時に重く感じられることがあるのも事実だと思う。けれども投げ出さないで最期まで付き合っている気持ちが大切だと思う。

「ホワイト・ゴッド」とはよく言ったものだと思う。ペットが飼い主を選べない以上、飼い主の考え方一つで彼らの運命は決まってしまう。彼らの声は私たちには届かないけれども、彼らはじっと見ている。私たちが何をしているのかを強いられるだろう。(正義の戦い)、それは少年や少女たちの夢、そして大人たちの希望だ。数年後、長い戦いの結果がでた時初めてJJの新サーガSWの全貌が明らかになるに違いない。

を守らなければならない。最早、伝説化した感がある勧善懲悪の世界を見事に蘇らせなければならぬ。それがSWだ。JJの後をひきつぐ監督たちは、善悪の判断が曖昧模糊になっている現実において、一見無用かと思われる純な戦

じつと見ているのだ。その純粋な目に私たちの姿はどう映っているのだろうか。自分よりも弱い立場にあるものに対して人はどのような接するのか。思いやりを持てるのか、尊大な態度になるのか。人こそが観察されているのかもしれない。街の中を駆け抜ける犬たちの姿を見て、人という縛りから解放された自由を感じずにはいられなかった。人の思惑に翻弄され邪険にされるくらいなら人といない方が幸せなのではないか。しかし彼らはペット、人と一緒にいたい生きられない哀しい存在なのだ。ならば、せめて彼らの信頼を裏切らないようにしなければならぬのではないか。

2本の作品を見て思ったのは、最近時間がなくてなかなか一緒にいられたかった我が家の犬たちと心置きなく思いっきり遊んであげようということだ。

——読者から——

警備員室午後十時

〈第3回〉

農律 捨丸

関田監督。また一年です。どんなに慣れたつもりでも、時の流れは残酷なもの。監督も私も、こうしてこのまま……。いやいや、グチを言うまえに、また近況から始めさせてください。

〈報告 一〉世の中に警備員は五十四万人ほどいるといえます。いろいろな内容の仕事がありますが、ともかく自衛官や警察官を合わせた数より多くのオジさんたちが、警備の仕事に就いています。ですから、何かあったときの体験もそれだけストックされているのが道理。「大したこと」ではありませんが、この冬もこんなことがあります。

した。夕方、六時すぎともなればもう真つ暗です。私の仕事は巡回というものですから、寒空の下、二人で組をつくり、懐中電灯を手に人気のなくなつた公園へパトロールに出ます。いくつかの運動施設の戸締りを確認するうちに、人のいないはずの木立ちの中から、大きなうなり声。すわ、事件かと身構えました。なにせ、こちらはTVドラマ「ザ・ガードマン」を見て育つた世代ですから。恐る恐るも、けして恐がつてはいないかのように声の発するほうへ歩くと、何のことはない、犬の散歩人が自分も大声で何かうなっているのでした。歌曲か民謡がよくわからない？ 仮に「真室川音頭」のようなものとしておきましょう。今の時間は、ここへの立ち入りは出来ません。外へ出てください」と声を掛けると、「どこにそう書いてある？」（そりや、確かにそんなものはない）「このことは明示してありませんが、皆さんご協力願っています」。そんな最中にも、自分の額につけたヘッドランプのLED光を私の顔に向けて、おまけに二頭の犬（これが放し飼いの状態）を私に仕向けてくる。「ここでお話は出来ませんから、明るいところへ

……」と私。「オレは税金を払っているんだぞ！」「税金なら、私も納めています」とまた私。よほどこちらがショボクレたやつに見えたのでしようか。今度はさらに私をねめ回して、「額がちがうなつ」ときました。十代だったら、ここでゲバルト…となるところです。LED光を逃れようとする私の胸につけたバッジをわしづかみにして、「農律か」。いやはや、危ないところですが、ここは私のほうから「お話しになりませんな」と退散することになりました。受傷事故という言葉が頭に浮かびます。真室川音頭氏は七十歳手前くらいでしようか。大変な自信です。こんなエゴ強者市民が多いから、世の中ガタつくんだなどと腹いせを考えながら、いままで忘れていた相棒を見ると、（この人も七十八歳です）この間どこにいらしたのやら？ こうして事故にも事件にもならず、暗闇での税額問答は立ち消えたのですが、その後もこの真室川音頭氏は、勝ち誇ったかのようにして、暗くなった木立ちの中での大発声練習に励んでおられます。（とくに土・日がひどい）まるで、私の巡回当番を待機していてくれるかのようなのです。

〈報告 二〉羊羹（ようかん）の話。高校野球の世界は一年中スケジュールが詰まっついていて、そりや大変です。春は春として、「春季大会」があり、第三・四回戦ともなると、硬式野球場がそのメッカとしての機能を発揮しますが、そんなある夜のこゝろ。三回目の巡回（職務上の秘密で時刻は内緒です）を終える頃に、野球場の一本の柱の陰に中ぐらいの手提げ袋を発見。爆発物か？ そんなはずはない。人もいなければ、金になる物もない場所だ。と思いながらも、袋の中を確かめました。ようかん。赤坂丁屋の超高級ようかんの五本セットです。「夜の梅」などという商品名も初見ならば、どんな味かを知るよしもない。まだまだ春浅い野球場の通路の忘れ物としてはいかにも不自然なものでした。ルールでは、管理者に届け出るのですが、まだ大会はつづいているのですから、関係者でもあればと、翌朝一番の手渡しでその事務局氏に扱いを委ねました。こんな高級品ひよっとして一本くらいは御礼が期待出来ないものかとの下心もたつぷりでしたが、とうとうこれは一方通行で終わりとなりました。ですが、深夜の球場、高級ようか

韓国・サスペンス映画が見逃せない

堀江広子

ん、そして大会は進行中。一体どういう取り合わせだったのでしょうか。謎なのです。(ググーッ)

〈報告 三〉監督。警備員って、引退がむずかしい仕事ですね。先ほどの相棒も高齢ですが、この方は大変な名物、いや人物で、「オレはこれまで、十人をクビにしました」という大警備員氏なのです。いちいちのケースを挙げられませんが、ともかくすごい。その人が、いよいよ病気で退くことになりました。おそらく家族からタオルが投げ込まれたようなのですが、さいごの一步まで歩き続けそうな老人

人なのでした。頑固ジイさん。その前の引退者も病気でタオルのケース。その前の人は、朝来た人にもう息をしない姿を発見されるという状態でした。……つまり、究極の労働のすがたがここにあります。人は誰でも、思い描いた人生を送り切れないとは知りながら、そのことを表現することもなく、実体としての己れを消して行かなくてはならないのが大方の人生でしょう。関田監督。残りの時間はあるようで少ないですよ。監督が動かなくては私の出番はやって来ない！ ちよい役で結構。せめて

与えよ表現の場を。この切実な思いをきいてください。

〈報告 四〉ところで、Y市の青少年施設の仕事はやめました。クビになったのかも知れませんが。いろいろ問題を抱えたまま、歓楽街の駅正面に移転して、何のための青少年育成かというひどい状況になったのです。こちらは、「やることはやった。あとは知ったことではない」。K市の少年リンチ事件では判決が出ましたが、関係者にとつては、少しも解決にはならないことでしょう。悪は悪とて、悲は悲とて、そのまま残るものと感じ

ます。

そして、私を警備員にしてくれた私の息子。林業地から戻りました。いまは東京五輪の仕事が掛かるスタジアムで、立派な芝を提供すべく、早朝からの仕事に頑張っています。巡回警備員っていうのも、こうしてささやかな日常を重ねながら、ずいぶんと考えさせられる仕事になりました。しかし、しかし明日の朝の太陽もまた、異常なく昇って来ること間違いありません。

初めて観た韓国映画は「シユリ」だった。二〇〇〇年ごろだったと思う。

一九五〇年に勃発した朝鮮戦争は正確には現在も休戦にあるという。今も北朝鮮と韓国の国境線では緊張状態が続いており時折り銃撃戦の報道を聞く。

歴史的に複雑な事情を下地にした映画「シユリ」は、サスペンスとアクションとロマンが入り混じり、スケールの大きさに加えて演出や俳優の質の高さに正直驚いた。

子どもの頃の思い

話がそれるが、歌手の谷村新司さんが先日テレビでこんな話をしていた。

彼が数年前まで中国で音楽学院の教授として講義をしていた時にひとりの学生から、「日本人は何故中国に背中を向けているのですか」と問われて、そうか、日本は

アメリカに近い太平洋側を表日本、中国や韓国に近い日本海側を裏日本と表していた時代があったなど。だから日本はアメリカやヨーロッパの方ばかりに関心を抱き、アジアに背を向けている国と思われる」と気付かされた。

テレビを見ていて私自身も無意識のうちにそのような感覚で生きて来たのだと思った。

長いこと欧米文化に対してはかすかな劣等感と共に憧れを抱いてきて、アジアの人たちに傲岸で不遜な気持ちを持っていたのではない。

音楽はアメリカのポップスを聴き、ハリウッド映画に夢中になるこそすれ、決してアジアに目を向けたら意識することは無かった。子どもの頃に住んでいた地域から少し離れた小山のふもとに朝鮮部落と呼ばれていた地区があり、私

が通っていた小学校にも朝鮮人の子どもたちがいて、日本人からいじめられるのを恐れて彼らはいつも集団で行動し、何かもめごとが起きると大勢で対処してくるので逆にこども心に朝鮮人は怖いというイメージを持っていた。交流はなく彼らの生活や内面を知る機会もないままであった。

転機

近年になって、韓国の大中氏拉致事件や北朝鮮による日本人拉致事件が表面化し、北と韓国との関係を報道で知ることになった。それでも、韓国に対して興味が湧くことは殆どなかったが、転機が訪れた。

十年ほど前多くの日本女性を歓喜させた韓流ドラマ「冬のソナタ」に、ご多分にもれず感動し、ペ・ヨンジュンに夢中になったものだ。当時の私の様子とその後の何事も無かったような態度を、今も時々娘からからかわれたりする。

「あのころの熱情がウソのようね、はしかにかかっていた？」と。何しろ、若いときから今まで自分の周囲にペ・ヨンジュンのような雰囲気を持つ男性に出会ったためしがなく、同じアジア人でこん

なに違うのかとちよとした衝撃を受けた。

ペ・ヨンジュンのような雰囲気とはつまり、日本の古い男性が持ち合わせていない雰囲気のこと。包み込むような微笑み、寛大さ、常に相手を気遣う態度、威張らない、怒鳴らない、愛する女性を素直に褒める、そういう雰囲気である。お金を出してホストクラブとやらに行けば出会えるかも知れないが。

とにかく「冬のソナタ」の演出は、安直かつご都合主義でツッコミどころ満載のとろけるように甘いメロドラマではあった。

その後も次々と韓流ドラマが放映されているが、同じような演出にすぐに飽きてしまい、映画に興味に移っていった。

サスペンス映画に嵌まる

「シュリ」以来、韓国サスペンスファンとなつてしまい、「殺人の追憶」で、とにかく刑事役のソン・ガンホに完全にイカれた。彼は決してハンサムでもなく、どちらかと言えばこついという印象だが、演技力が凄い。韓国の俳優の中で一番好きな人である。

随分前に観た映画なので、記憶

はおぼろげだが、カメラワークの斬新さとソン・ガンホ演じる刑事の愚直なまでの執拗さが印象的だ。実際に起きた事件をベースにしているという。和訳タイトルも気に入った。

ソン・ガンホが「シュリ」にも出ていたのは随分後で分かった。「シュリ」では、韓国諜報部員役のハン・ソッキュと北朝鮮工作員役のキム・ユンジン（悲恋が感涙もので、北の工作員役のチェ・ミンシクの強烈なキャラクターに目を奪われていたので韓国諜報部員で出ていたソン・ガンホが印象になったのだ）。

「シュリ」の監督は一九六二年生まれのカン・ジェギユで、朝鮮戦争を真正面から捉えた映画として韓国内で大ヒットしたという「ブラザーフッド」も手がけた人だが、残念ながらこの映画を観ていないのでいつかは是非観たいと思っている。

二〇〇四年には日本でも話題になった「シルミド」（監督カン・ウソク）は、一九七一年に北の金日成暗殺計画を企てた韓国政府が、シルミドという島に三十人ほどの様々な職業の男性を高額な報酬で集めて訓練させた事実をもとに作

られた映画である。

ボン・ジュノという監督が手がけた「チエイサー」も秀作だと思う。この映画も実際に起きた連続殺人事件をヒントに制作されたのだという。

「チエイサー」の主人公は元刑事で今はデリヘルなどという良からぬ商売をしている男。短気だが妙に情に厚いキャラクターを演じたキム・ヨンソクの演技が光る。ハ・ジョンウの演じるシリアルキラの身の毛もよだつ行為にはトラウマになってしまふほどだった。監督のボン・ジュノの描くサスペンスは、社会や人間の闇の部分をあぶり出す。シリアルキラやサイコパスの演出もうまいと思う。

「母なる証明」はある殺人事件をめぐる知的障害のある息子の無実を信じて奔走する母親の姿に心動かれ、最後、冤罪の疑いが晴れて母親の乗るバスを見送る息子の言葉に観客は呆然とするに違いない。母親をキム・ヘジャ、息子はウォンビンが演じた。

「ゲムル」漢江の怪物」という作品は、日本の昔のテレビドラマ「ウルトラQ」に似たB級娯楽SFものと思っていたが、実は反米的な意味合いを持っているらし

い。駐留していたアメリカ軍が漢江の川にホルムアルデヒドを流した実際の事件から着想を得たという。

チョン・ビョンギル監督による「殺人の告白」は、アクシオンは地味だが、意外な展開と結末が刺激的な作品だ。『殺人犯はわたしだ』と告白する男を演じたパク・シフの知的な雰囲気は素敵だ。「泣く男」という映画はハリウッド映画顔負けのすさまじい銃撃戦とチャン・ドンゴン演じる男の繊細な内面の対比が秀逸だったが、なぜタイトルが「泣く男」なのかが分かったりづらい。

「トガニ〜幼き瞳の告発〜」も本当の話らしい。ろう学校の子どもたちに行った福祉施設の理事長らによる性的虐待や暴力をコン・ユ演じる新任教師と人権センターの女性が告発するというもの。

その実態が暴かれていく中で分かってくる、深刻な賄賂社会も垣間見えて奥行きのある作品となっている。

タブーなき演出に唸る

韓国サスペンス映画は、グロテスクな暴力描写は定評があり、思わず目を覆うこともしばしばなの

だが、容赦ない演出と人間の弱さとのギャップを見せるのが実にうまい。日本人と韓国人は外見もとても良く似ていて、文化や生活習慣の違いはあっても、内面は良く通じ合えると思う。

それは、欧米人とは違うアジア人として共通の情緒・情感を持っているからではないだろうか。

勿論、アメリカ映画や欧州の映画を観て心震わすことも多い。同じ人間なのだから当然である。

だが、外国人の作った映画として観ている自分を、僅かながらでも忘れてしまうことはない。

対して、韓国の映画を観ているときは、国の違いを越えて似たような風貌に自分が殆ど同化してしまう錯覚に陥るから興味が尽きないのだ。

ただそれは、やはりテレビドラマの演出というのは日本も同様で視聴者の目をかなり意識して作られているようだ。視聴者にワクワクドキドキさせてしかも安心感も与えながら毎回観て貰わなければ成立しない世界なので、パターン化しがちなのである。安心感というのがキーワードだろう。

安心感とはすなわち、常識と社会通念からはみ出しすぎない感覚

といえるだろうか。

その点映画は、撮りたいように撮るというのが第一義にあり、タブーを出来るだけ取り除き描きたいと思うのが監督の性^{さが}であろう。

日本の映画もいいものはたくさんあると思う。だが私がいいと思うものは随分昔の作品が多くて、俳優が雲の上の存在で文字通りスターであつた時代の映画には気持ちよく浸れるのだ。

現在の若手監督のものでこれだけはどうしても観ておきたいなあと感じる作品は、残念ながら非常に希であると言わざるを得ない。俳優にも食傷気味で食わず嫌いとなっているのも否めない。韓国映画では俳優について何も知らないから内容にすんなりのめり込めるのがいい。

韓国サスペンスは、むごたらしい場面も多い。それでも構成に伏線が幾重にも用意されていて、最後の最後に思わずのけぞるようなドンデン返しがあつたりして飽きさせない。暴力のみに終わらずさとって情緒に傾きすぎない冷徹さがほどよく、充足感に浸れるところがいい。今後も観客を魅了し続ける作品を期待して止まない。

● かつての撮影所の映画作りの実際を、裏も表も率直に書いた本だ。とても面白い、映画によせる思いに感動した。(映画評論家・佐藤忠男)

● ちよつと異色の本である。ピュアな映画愛と趣が違う。(『キネマ旬報』映画評論家・尾形敏朗)

● 映画界の盛衰、1作が完成するまでの映画人の苦闘、華やかな世界の内幕や裏話を軽妙な筆致で伝え哀歓がにじみます。(『しんぶん赤旗』)

● プロデューサーならではの視点で綴る泣き笑いの奮闘を通して、巨匠から俊英まで監督、俳優たちの素顔が生き生きと描かれる。担当した名作や歴史に埋もれた映画の裏話も興味深い。(『出版ニュース』)

昭和映画屋渡世

坊っちゃんプロデューサー奮闘記



斎藤次男・著 四六判256ページ
2376円

ごめ書房

〒270-0107
千葉県流山市西深井339-2
電話 04-71156171
FAX 04-71156171

イラスト & エッセイ 心の溝を埋める出会いの物語

『めぐり逢わせのお弁当』

中田好美

ダッバーワラー

繰り返される日々の中、いつしか生まれた心の溝。そんな寂しさを満たせる存在とめぐり逢えたら。この作品は、夫との冷えた関係に思い悩む女性と、妻に先立たれ、孤独に生きる男性が、お弁当によってめぐり逢う物語である。彩り鮮やかなお弁当と、変わりゆく日常の繊細な描写が見所となっている。

ヒンディー語でダッバーは「容器」、ワローは「〜と関係した職業の人」という語となり、「弁当の運び屋」という意味になるそう。英領植民地時代に、イギリス企業で働いていたインド人の多くは、勤務先で出されるイギリス料理に嫌気が差していた。また、料理自体がヒンズー教やイスラム教の禁忌に触れてしまったり、インド特有のカースト制の問題もあった。上位カーストが下位カーストの作った料理を食べることに抵抗があったため、インド料理を提供するのも難しかった。その結果、自宅で家族が調理した昼食を勤務先へ届けるというビジネスが始まったのだ。ムンバイでのビジネスは、125年以上の歴史があるという。毎日17万5千個以上のお弁当を5千人程のダッバーワラーによって、ランチタイムに間に合うよう配達されている。配達間違いも600万個にわずかにひとつの割合という。

このわずかにひとつの配達間違いが、映画の要となっている。

話しの発端は間違い弁当

主婦のイラ(ニムラト・カウル)は、夫であるラジーヴ(ナクル・

ヴァイド)に毎日お弁当を作りながら、家事や育児に勤しむ。そんな日々の中、イラに対するラジーヴの態度は冷たく、帰宅しても携帯の画面を見つめるばかり。

イラは料理で愛を伝えようと、食材やスパイスで工夫を凝らし、手の込んだお弁当を作る。配達人がお弁当を引き取りにくると、想いの全てを託すかのように大切に手渡す。

インドのお弁当箱は、ステンレス製で丸いフォルムをしており、重箱のように重ねて使うことができる。夫が出勤した後に作り始め、職場に届く頃にはちょうど良い温度になっているそう。届けられたお弁当は、夫が帰宅する前に自宅へ戻ってくる。

お弁当が配達人によって戻ってくると、イラはすかさずお弁当を振る。その重さで、おかずの残りを確認するために。特別な想いを込めたイラにとって、中身の確認は緊張の瞬間である。軽さに気づき、急いで確認すると、いつも残されていたお弁当は、なめたように綺麗だった。

イラは、ラジーヴに愛が伝わったのだと喜び、おめかしをして待っていた。帰宅したラジーヴにお

弁当の感想を聞くと、「いつもと同じ、おいしいよ。カリフラワーがすごくうまかった」と言われる。そもそも今日のお弁当にカリフラワーは入っていないかった。愛情を込めたお弁当は、どこか違う場所へと届けられていたのだ。

しかし、毎日食べている妻の味と、よそのお弁当が同じとは、何と悲しいことか。作る人が変われば、料理の味も全く異なるというのに、この作品に登場する夫は、妻に無関心なのである。無関心ほど悲しいものはない。お弁当を毎日せつせと作っても、感想もなければ、感謝もされない。夕食はテレビがメインで、ごはんの味など気にもしていない様子。会話のない夕食は、どれほど寂しいことか。大人より子供の方が感受性が鋭い。両親をそばで見ている娘もつまらなそうにしている。

集合住宅の上階に住むおばさん(バーラティー・アーチュレール)は、作中で一度も姿を見せないが、イラを気にかけて色々とお弁当をしてくれる。「アンティー(おばさん)！」と大声で呼びかければ、上階から元気に返してくれる。

おばさんに、お弁当が違う場所

に届いたことを報告すると、綺麗に食べてくれた相手に礼状を書いてみたらと提案される。ラジーヴに届いたらと心配するが、おばさんはすかさず「よその弁当だと気づかない夫に思い知らせておやり」と言い放つ。声だけの出演にもかかわらず、長年生きてきた貫禄と、恰幅のよい姿が想像できる。そして次の日、見知らぬ届け先の人物へと、イラは手紙を書くのであった。

一方、イラのお弁当が間違って配達されたサージャン（イルファーン・カーン）は、ピカピカに磨かれたお弁当箱を見て、いつもと違うことに気づく。四段のお弁当には、野菜の炒め物、チャーワル（ゴはん）、チャパティ（薄焼きパン）、ダール（豆のスープ）がそれぞれ詰まっている。お弁当の香りを嗅ぐと、首を傾げながら炒め物を一口食べる。その味を不思議に思いながらも、しつとりとしたチャパティや、手の込んだおかずの数々に感動するのである。いつも注文している弁当屋に「とてもうまくいった、すばらしい弁当だ」と伝えるほど、サージャンの口にとっても合うお弁当であった。

退職控えた初老の男

サージャンは、早期定年退職を控えた初老の男性。毎日満員電車で揺られながら通勤し、会社では気難しい表情をしている。近所で遊ぶ子供たちにも厳しく接するため、煙たがられてしまう。両親を亡くし、妻に先立たれ、帰宅して部屋は暗く静まり返っている。夕暮れ時、ベランダでタバコをふかしながら、向かいの家に視線を向けると、近所の子供たちが賑やかな食卓を囲んでいる。しばらくボーっと見ていると、女の子がサージャンの視線に気づき、窓を閉め切ってしまう。この窓の開き具合は、物語が進むにつれ変化する。近所の子供たちとの距離感や、サージャンの心境が窓で表現されているように感じ、とても面白いと思った。

次の日、サージャンの元に届いたお弁当の中に、イラからの手紙が入っていた。

「残さず食べてくれてありがとう。あれは夫に作ったお弁当です。空っぽだったので夫に褒められると思います、料理で愛が伝わると幸せな気分でした。そのお礼にパニールをどうぞ。夫の好物です。イラ」

手紙を読んだサージャンは、お弁当の中に返事を残し、そこから二人の文通が始まるのであった。

サージャンは、イラとの文通だけでなく、仕事でも変化が起きる。サージャンの引き継ぎのため、

雇われたシャイク（ナワーズディーン・シッディキー）は、なかなかの曲者。孤児であるシャイクは、名前も自分でつけ、様々なことを独学で学んできた。それゆえ、距離感やマナーが独特なのである。初日からサージャンとの約束の時間に来なかったり、自分が遅れたのに「昨日は早く退社したんです、僕は気にしてませんよ」という。サージャンが手紙を読んでいる最中に「どうも!」という感じで割り込んできたり、電車内で野菜を切ったりと、このシャイクの図太いシーンの数々に何度もう笑った。インドでは、長い通勤時間を有効活用するため、電車内で下ごしらえをする光景はよくあるのだそう。日本とは異なる時間の活用法にとっても驚いた。

サージャンは、シャイクに対して冷たい対応をしていたが、イラのお弁当と一緒に食べたり、帰路を共にするうちに、二人の関係も変化してゆく。

サージャンは、毎日のお弁当と手紙が楽しみとなり、お弁当が机に届くと、待ちきれない様子でそわそわする。お弁当袋の隙間から香りを嗅ぐ姿を、同僚がまじまじと見つめるシーンが面白い。

お弁当を作るイラも、サージャンの手紙を読むうちに、表情が明るくなってゆく。繰り返される日々の中でも、感謝の言葉や「おいしい」のひと言は、主婦にとつて大切な支えとなる。サージャンから伝えられるお弁当への感想や、ユーモアを交えたアドバイスを、イラは少しずつ笑顔になるのであった。

文通を経て待ち合わせ

イラは、サージャンのアドバイスをきつかけに、もう一度ラジーヴの心を惹こうと努力する。ハネムーンのときに着た服を纏い、「ヤシュヴィ（娘）に弟か妹を作らない?」と聞くと、受験を苦に自殺してしまったイラの弟を引き合いに出され、断られてしまう。心無いラジーヴの言葉に、イラの心は深く傷ついてしまった。

次の日、サージャンはバスで通勤中、渋滞に巻き込まれてしまう。バスからタクシーに乗り換えると、



🍱 めぐり逢わせのお弁当 🍱

渋滞の原因は、母と娘がビルから飛び降りたからだ、と、運転手に聞かされる。イラの悩みを知っていたサージンは、「母と娘」という言葉が気になり、お弁当が机に届くまで気が気で無い様子。そしてお弁当が届くと、思い過ごしであることを願いながら、そつと香りを嗅ぐ。その親しみのある香りに、ほつと胸をなでおろすのであった。イラは、手紙で母子心中のニュースに触れ、自分の弟のことについて書いた。「私の弟が死んだときも、世間は彼を責めたわ。試験に落ちたぐらい何だ、心が弱いからだ」と。弟を理解していたがゆえ、母子の気持ちも痛いほどに分かったのだらう。手すりに立つ怖さがどれほどのものか。心が弱いと飛び降りられないことをイラは知っていた。

そんなイラの気持ちをサージンは優しく受け止め、温かい返事を書くのであった。

イラは、サージンの手紙をよりどころに、再び家事を繰り返す日々。そんなある日、洗濯物の匂いを嗅ぐ習慣のあったイラは、ラジーヴのシャツの匂いがいつもと違うことに気づく。携帯の画面ばかり見ていたラジーヴは、浮気を

していたのである。

イラは、手紙に夫が浮気していることを書き、「ブータンでは、誰もが幸せだそうよ。大切なのは、GDPより国民総幸福量。インドもそうだといいのに」とこぼす。

そんなイラに対し、「あなたとブータンへ行けたらいいな」と素直な気持ちをサージンは伝える。この短い手紙を書くのに、どれほどの勇気が必要だっただろう。イラへの想いで胸がいっぱいになり、サージンは初めてお弁当を残してしまふ。以前手紙で伝えた、大好物のナスが入っていたのに。

イラは「あなたとブータンへ行くの？ 名前も知らないのに」と返す。このシーンで初めて、イラが文通相手から名前を知らされていないことに気づいた。今までは、互いの手紙を台詞で表現していたが、この時だけ、サージンからの返事が明かされないのだ。その代わりに、イラが上階のおばさんに音楽テープをリクエストして、『サージン／愛しい人』の主題歌が流れてくる。イラは、相手の名前がサージンというのを知り、文通相手と同じ名前の曲をリクエストしたのだ。イラの心情を歌に乗せる演出がとても素敵だな

と思った。

恋する心が燃え上がる

この愛は何て向こう見ず

あなたに心を乱されて

愛が強まっていくの

いとしい人よ私のサージアン
大切な人よ私のサージアン

イラはこの歌を聞きながら、「いつまでも文通を続けるの? 手紙だ何でも気楽に書けるけど、これだけは目を見ながら伝えたい。私たちは逢うべきだわ」と、待ち合わせの日時を手紙に書き添えるのであった。

その手紙を読んだサージアンは、思わず口元がゆるむ。ほとんど笑うことのないサージアンの笑顔が、とても印象に残った。

次の日、イラは指定したカフェでサージアンを待つが、いつまでも経っても現れない。水を飲み、辺りを何度も見渡すが、結局サージアンは現れなかった。イラは、その感情を空っぽのお弁当箱でサージアンに伝えた。

お弁当を受け取ったサージアンは、イラへの想いを綴った。

当日、指定されたカフェにサージアンも居たのである。イラの姿

をみて、「声をかけたかったが、離れて見つめるだけ。君は美しかった。君は若くて、夢見る年頃だ。夢を見させてくれて心から感謝してるよ」と胸のうちを述べるのであった。

この手紙の中で印象に残ったのが、自分の老いに気付いたサージアンのこと。

昨日の朝出かけようとして、あることに気づき、洗面所に戻った。すると、懐かしい匂いがした。祖父がシャワーを浴びたあとの匂いだ。まるで彼がいたような……でも、そこにいたのは私だけだ。私から晩年の匂いがした。いつ老け込んだのか。その朝、老け込んだのか、ずっと前からだったのか。洗面所に引き返していたら、そのとき気づいたはずだ。

待ち合わせ場所へと向かう電車内で「おじさん、座りますか?」と席を譲られ、老いを改めて自覚する。手紙では相手の顔が見えず、当然年齢も分からない。逢いたかったイラとの年齢が余りにも離れていた。喜びから一転、サージャ

ンのやるせない表情が何とも切ない。

人は、老いというものにいつ気づくのか。誕生日を迎えた時か、白髪が増えた時か、顔のシワが増えた時か。私が歳を感じたのは、似合っていた服が似合わなくなった時である。いつ似合わなくなったのか、見た目の変化なのか、心の変化なのか。どちらで歳を感じるのだろうか、ふと考えた。

見知らぬ人への恋心

サージアンと逢うことができず、落ち込むイラの元に、母（リレツト・デュベイ）からの電話。肺癌を患っていた父が、亡くなったことを伝えられる。母の元に駆け寄るイラだったが、周りに人が居るにもかかわらず、長い介護生活の苦しみを母からぶちまけられてしまう。

「最初の頃は、心から愛し合っていた。あなたを産んだときも幸せだったわ。でも何年かたつと、パパがうとましくなった。朝起きたらパパの朝食を作り、薬を飲ませて入浴させる。朝食、薬、入浴」長い介護生活は、心も体も疲弊してしまう。イラが幼い頃に見ていた母の姿は、そこにはなかった。

そんな母の姿にショックを受けたのか、それとも未来の自分の姿を想像してしまったのか。

次の日イラは、配達人にお弁当の届け先が間違っていることを伝え、サージアンの勤務先を聞き出す。娘と共にタクシーに乗り、勤務先へ到着すると、サージアンの席へと急いだ。しかし、そこに座っていたのはサージアンではなく、シャイクであった。シャイクから、サージアンは退職し、故郷であるナーシクに向かったことを聞かされる。サージアンとイラは、ちょうど行き違いになってしまった。何もかも終わってしまったのかと、呆然とするイラ。その日の夜、装飾品を外し、家を出る決意をする。今までの生活を捨て、新しい環境で生きることは、どれほど大変か。愛のない日々を過ごすよりも、娘と二人で生きる道をイラは選んだのだ。

次の日、イラはナーシクにいて、あるう、サージアンへと手紙を書く。

あなたは今、ナーシクね。朝起きたらチャイを淹れて、それから散歩に出かける。私は朝起きて、装飾品を売ってき

たわ。腕輪、イヤリング、結婚の印のネックレス。少しの額だけど、ブータンでは1ルピーの価値が5倍だから、しばらくは暮らせるわ。そのあとは…そのとき分かることよ。娘が帰るまでに荷造りして、夕方の電車に乗るわ。ナーシクの郵便配達にこの手紙を届けてもらうか、それとも私が持っていて、時々読み返そうかしら。どこかの空の下で…間違えた電車でも正しい場所に着くのか、今に分かる。

イラの朗読をバックに、サージヤンがダッバーワラーたちに、イラの住所を聞いて歩く描写がある。サージヤンはナーシクに移り住もうとしたが、結局その日のうちにムンバイへと戻ってきた。

それは、ナーシク行きの電車内で相席になった、老人に言われた言葉がきっかけだった。

「ナーシクへ行くのか？ 住むつもりなのか？ わしは数年前に仕事を辞めて、時々息子に逢いに戻る」車内の机をトントンと叩く老いた手が、アップで映される。このままで本当に良いのだろうか。歳が離れていても、あんなに

も心が通じ合える人とめぐり逢えたのに……。内省するサージヤンの表情が印象に残る。サージヤンは、相席した老人よりも若く、全てを諦めるにはまだ早かった。

イラが家を出ると同日、決意したサージヤンは、ダッバーワラーたちと共に列車に乗り、イラの元へ向かう。車内では、ダッバーワラーたちが「聖トウカラームをたたえよう、ありがたき聖ドゥニャノバー、我らを守りたまえ聖ドゥニャノバー」と歌い、そのままクレジットが流れる。

この歌に何か意味が隠されているのではと思ひ、色々調べてみたが、単純に日常の光景として宗教歌を歌うようだ。時間に追われるダッバーワラーたちにとって、帰路の電車内はリラックスできるひと時。空のお弁当箱の脇で、みんなで宗教歌を歌うのが習わしとなっているようだ。

イラの手紙はサージヤンの元に届いたのか、すれ違った二人の結末は描かれないまま、映画は終わってしまう。

観る人によって、結末の受け取り方は様々かもしれない。イラは夕方の電車に乗り、サージヤンはイラの元へ向かう電車に乗る。間

違えた電車でも正しい場所に着くのなら、二人はもう一度めぐり逢うことができたのではないかと思っている。サージヤンの暮らす家で、娘と共に温かい食卓を囲んでいる結末をひとり思い描いた。観る度に異なる視点に気づくことのできる、素敵な映画であった。



お弁当の思い出の数々

映画を観ながら、自分が食べていたお弁当の数々を思い出した。

母は、幼稚園、小学校、中学校と欠かさずお弁当を作ってくれた。好き嫌いの激しい私のお弁当作りは、特に苦労したであろう。そんな母の一番の喜びは、おかずもごはんも綺麗に食べた、空っぽのお弁当箱を見るとときであった。

そんな母に対し、幼いながらもお弁当で傷つけてしまったことがある。それは、苦手なおかずを捨ててしまったときのこと。

小学校のお弁当は、先生と一緒に食べることもあり、そんな時に限って、私の大嫌いなブチトマトが入っているのだ。噛んだ瞬間に広がる酸味と青臭さ、そしてあのゼリー部分の食感が本当に嫌いだ。これをどうしたものか……。

あれこれ考えた末、ブチトマトを最後まで残し、ごちそうさまのタイミングで口の中へ放り込む。当然ほっぺはリスのごとく膨らむのだが、幼い私は上手く隠せているつもりでいた。その後、すました顔でトイレに駆け込み、ブチトマトを「ぺっ」と流していたのである。

その後、注意が行き届く先生にばれてしまい、こつてりと油を絞られた。何より、それを知ったときの、母の悲しそうな顔が忘れられない。お弁当のおかずは、ひとつひとつに意味があり、大切な体をつくる。そのような想いが込められていることも知らずに、何とも罰当たりなことをしてしまった。トマトが食べられるようになったのは、祖母の手作りトマトを食べたときである。甘くて瑞々しいおいしさに感動し、トマトジュースやブチトマトまで食べられるようになった。嫌いな食べ物好きになる瞬間は「まずい」を上回る、「おいしい」に出会えたときだ。

そんな祖母が作ってくれたお弁当は、変わり種の一品。祖母が旭川に住んでいた頃、夏休みを利用してよく遊びに行っていた。遊びに行くと、必ず祖父の

最近気になる5人の女優 & 「女子ーズ」

関口健一

お墓参りに行くのだが、祖母の作るお弁当は、決まって素麺だった。麺同士がくっついていても食べやすいよう、くるくると小さく渦状にまとめられていた。めんつゆ、水筒でキンキンに冷えたお水、すりごま、ねぎ、しょうが、七味、お酢等を好みで加える。祖父のお墓を皆で手入れし、手を合わせた後に食べる素麺は、何とも特別な味であった。同じお弁当を家族で食べる幸せは、何よりの隠し味である。最後に、お弁当の時間に起きてしまったハブニングをひとつ。

母のお弁当には、果物やデザートが入っていることもあり、その中でもオレンジゼリーが大好きだった。くり抜いたオレンジの中に、ゼラチンを混ぜた果汁を注ぎ、そのまま冷蔵庫で固める。包丁で切ると見た目がオレンジに見える、とてもおいしいゼリーなのだ。

このオレンジゼリーでハブニングが起きてしまった。その日のお弁当は、先生と一緒に食べる日であった。ゼリーを友人の前で食べていたのだが、ゼリー部分を食べた後、残った皮をそのまま口

に入れ、ニカッと笑って見せた。次の瞬間、友人は飲んでいたお茶を吹いてしまい、そのお茶が有ろうことか先生の顔面にかかってしまった。友人はお茶にむせて苦しみ、先生は激怒しながら顔を拭うという、何とも酷いお弁当の時間であった。

お弁当ひとつをとっても、書ききれない思い出であふれている。学校でお弁当を忘れてしまったとき、友人たちがお弁当箱の蓋に、おかずやごはんを分けてくれた。そこには様々な家庭の味があり、

どれもおいしくバイキングのような昼食であった。中学校最後のお弁当は、大好物のいくらものちらし寿司を持たせてくれた。愛情を注ぎ続けてくれた母のお弁当は、今でも忘れられない。

今日もどこかで、誰かのために作られるお弁当。その心まで相手に届いたなら、それは何よりもの幸せ。家庭それぞれの彩りを想像をしながら、ふと自分の思い出に浸るのであった。

最近、ここ2〜3年目覚ましいほど若手女優が活躍している。スクリーンの中ではもちろんのこと、テレビのドラマやコマーシャルでも。その中でも、注目している女優が5人いる。今回は、その5人のことを書いてみようと思う。

●桐谷美玲

まずは、桐谷美玲。この女優は「女子ーズ」という映画で知った。実は、僕が注目している女優さんの中の3人が「女子ーズ」に出演しているのだ。もしかしたら「女子ーズ」はトレンドディー映画かも知れないと思うほど、今人気の若手女優が出演しているのだ。だけ

ど、「女子ーズ」という映画を知らない人も多い。それは、とても面白い映画だが観客層をどこに絞っているのかわからない点だと思う。「女子ーズ」のことは、後で書くことにしよう。

桐谷美玲のことを知ったのは、某建設会社のコマーシャルだ。綺麗な女の子だなあ...というのが第一印象だった。演技を見たのは、映画の「女子ーズ」だ。

そして、テレビドラマの「スミカスミレ」や映画の「ヒロイン失格」だ。被り物を被ったり、心は60代でハタチの大学生の女の子を演じたり、女優とは思えないくら

いの変顔をしたり、多彩な女優さんだ。

多彩な演技力を持つ桐谷美玲にはいろいろな役をやってもらいたいと思う。

●土屋太鳳

僕が気になる若手女優二人目は、土屋太鳳だ。若手というが、女優歴はすでに8年。ワンシーンだが、NHKの大河ドラマ「龍馬伝」にも出演している。そして、テレビ朝日系列のドラマ「リミット」に出演していた。「リミット」には増田有華も出演していたから見ていたが、その時は土屋太鳳に気づかなかった。僕が土屋太鳳を知った

のは、NHKの連続テレビ小説「花子とアン」だ。このドラマでは、主人公安東花子の妹・もも役で出演していたのだ。明治時代、山梨の田舎暮らしの設定でほとんどのシーンがスッピンだったが、お見合いのシーンは綺麗で華やかだった。それで、気になり出した。そして、NHK連続テレビ小説「まれ」のヒロイン津村希役を演じた。放送がスタートする半年前から土屋太鳳が連続テレビ小説「まれ」に主演するというのを知っていたので、放送が始まるのが楽しみだった。このドラマで土屋太鳳は、高校生から二十五歳の母親まで演じた。さすがに二十五歳の母親を演じるには若過ぎると思ったが、女性がいちばん変化する年ごろを見事に演じている。年齢ごとに衣装や髪型を変えていたが、演技力は素晴らしいと思った。また、ドラマ「お迎えデス。」では、毎回短パン姿で長くて美しい足を披露している。土屋太鳳のスタイルの良さに、毎回うつとりしながら見ていた。残念なことに土屋太鳳が出演している映画は、まだ見ていない。土屋太鳳が出演している「ORANGE」を見たいと思っているが、公開中病み上がりでまだ映

画館に行く体力がなかった。WOWOWで「ORANGE」が放映されるのを楽しみにしている。

●有村架純

僕が気になる若手女優三人目は、有村架純だ。有村架純を知ったのは、NHK連続テレビ小説「あまちゃん」だ。「あまちゃん」では、回想シーンで小泉今日子が演じる天野春子の若い時を演じている。ヘアメイクの効果もあるが、そっくりで最初は小泉今日子本人だと思っていた僕だった。だから、有村架純が演じているとわかった時は、小泉今日子じゃないんだ！と驚いた。有村架純は「あまちゃん」と同時期に、フジテレビ系列の「スターマン〜この星の恋〜」というドラマに白井祥子役で出演している。このドラマの中では、同じスーパーマーケットで働く國村隼が演じる重田信三に襲われるシーンを体当たりで演じている。映画「へびにピアス」の古高由里子や「海猫」の伊東美咲の体を張った演技を見ると、女優魂を感じる。有村架純が出演している映画は「女子ーズ」のほかに、「ビリギャル」や「ストロボ・エッジ」がある。実年齢より若く見えるのか、どちら共女子高生役を演じている。ど

ちらかといえ、有村架純は童顔だ。だから女子高生でも十分似合っているが、もう少し大人の役を演じている姿も見たいと思う。

●高畑充希

僕が気になる若手女優四人目は、高畑充希だ。高畑充希を知ったのは、チョーヤ梅酒株式会社の「酔わないウメツシユ」のコーマシヤルだ。ずいぶん歌が上手い女の子だというのが、第一印象だった。そしてインターネットで名前を調べ、ウィキペディアで肩書きや経歴を知った。歌手兼女優だということ。学園ドラマ「3年B組金八先生」に出演していたこと、ミュージカル「ピーターパン」に主演していたことなどを知った。高畑充希の演技を初めて見たのは、フジテレビ系列の「問題のあるレストラン」というドラマだ。元上司からのセクハラを受けたり、恋人からの暴力を受ける川奈藍里役で出演していた。恋人からのDVを受けるシーンは、ドラマとわかっていても目を覆いたくなるほど、リアリティがあった。そんなシーンを見事に演じた高畑充希に、やっぱり女優魂があると思った。そして、「いやおうなしに」というお芝居に古田新太や小泉今日子と共

演じたのをWOWOWで見た。何が起きてもしない女子高生役を飄々と演じていた。歌のシーンもあって、やっぱりミュージカル女優だと思った。実写版の「シンデレラ」では、吹き替えで主人公エラの声を演じている。映画館へ見に行きたかったが、時間が取れなくて見に行けなかった。だが、今年のゴールデンウィークにWOWOWで「シンデレラ」の吹き替え版を観た。映画の冒頭はそんなに良いとは思わなかったが、シンデレラが鼻歌を歌って王子様の家来に見つかるシーンがある。そのシーンを見た時、歌がうまい高畑充希が吹き替えで良かったと思った。声だけの出演といえば、ACジャパンのコーマシヤルが高畑充希だ。どこかで聞いたことがあると思ってインターネットで調べたら、高畑充希だった。チョーヤのコーマシヤルとは違って、憂いがある語り方が味を出していて良い。そして、今年の冬場にフジテレビ系列でやっていた「いつかこの恋を思い出してきっと泣いてしまう」で日向木穂子役で出演していた。このドラマでは、有村架純と共演している。だから、有村架純とのシーンは見応えがあった。そ

して、現在放送しているNHK連続テレビ小説「とと姉ちゃん」でヒロインの常子を演じている。常子は小橋家の長女で、鞠子と美子という妹が二人いる。常子が十歳の時に、父親を結核で亡くしてしまう。そして長女の常子は、父親の代わりになって家族を守ると宣言する。しかし妹たちは父親を亡くした悲しみを背負ったままでいた。特に下の妹の美子は、父親が亡くなって5年経っても悲しみは癒えなかった。そんなある日、常子はおはじきを使って変顔をして美子をお笑わせるシーンがある。このシーンは、鞠子や母・君子もいっしょに美子をなだめているシーンだ。君子と鞠子が美子をなだめている時に常子はまぶたの上に乗せようとする。だが、なかなかおはじきが乗らない。苦戦して、三度目にやっとおはじきに乗ってその顔を美子に見せるシーンがほのぼのしている。ほかにも美子とおままごとをしているシーンがあるんだけど、そのシーンも面白い。おままごとの中の常子は、赤ちゃん役。つまり高畑充希が赤ちゃんを演じている。たぶんもう二度とないレアなシーンだと思う。高畑充希の演技力の幅広さを感じた。

● 広瀬すず
これからの成長が楽しみな女優だ。

僕が気になる女優最後の五人目は、広瀬すずだ。僕が初めて広瀬すずを見たのは、JRSKISKIのコーマーシャルだ。愛くるしい広瀬すずを見て「この子、絶対売れる！」と思った。広瀬すずは、数多くのコーマーシャルに出演している。中でも僕が好きなのは、東京ガスのエネファームとレオパレス21のコーマーシャルだ。面白い。矢島健一や平泉成といった自分のお父さんやお爺さんぐらいの俳優との共演にも動じない、飄々とした演技が広瀬すずの凄さだと思う。映画「海街diary」では、綾瀬はるか・長澤まさみ・夏帆と共演して異母姉妹の四女すずを演じている。残念ながら、この映画も入院して見て行けなかった。けれど今年の五月にフジテレビで放映した。自分だけ母親が違う末っ子のすずは、お姉さんたちに少し遠慮がち。そして、悲しかったそんなすずの心情を表現する演技が、広瀬すずに合っていて良かった。広瀬すずが出演している映画で、映画館へ見に行ったのが「ちはやふる」だ。競技かるたを題材にした映画で、広瀬すずは競技か

るたに青春を燃やしている女子高生綾瀬千早を演じている。この映画は上の句と下の句の二部作となっていて、二本合わせて一つの物語になっている。だから、上の句の最後がまるで連続ドラマのようだ。ゴールデンに入ってから公開した下の句は、千早の幼なじみの新の家に行くシーンから始まる。下の句の冒頭では、上の句を見ないとストーリーがわからないと思う。しかし、回想シーンとして上の句のシーンも多く使われているので、上の句を見てなくても充分楽しめる映画だ。競技中の白熱した演技は、迫力を感じる。競技が終わって、一気に緊張が抜けて白目を向いて爆睡する。その落差が面白かった。コーマーシャルとは違って、十七歳の等身大の広瀬すずが見られたような気がした。

● 桐谷らが共演、「女子ーズ」

最後に僕が注目している五人の中の三人が出演している映画「女子ーズ」のことを書こう。「女子ーズ」というタイトルから、どんな内容の映画を想像するだろうか？女の子が主役のラブストーリー？はたまた、女子会を題材にした物語？僕は見るまで、女子会を題材にした映画だと思っていた。こ

の映画は、ラブストーリーでも女子会を題材にした映画でもない。この映画はなんと、戦隊ものなのだ。どこにでもいそうな普通の女の子が、地球の平和を守るために怪獣と戦うストーリーだ。レッドの赤木直子役が桐谷美玲。イエローの黄川田ゆり役が高畑充希。グリーン緑山かのこ役が有村架純だ。そのほかに、ブルーの青田美佳役が藤井美菜、ネイビーの紺野すみれ役を山本美月が演じている。ある日突然、戦隊を取り仕切っているチャールズという男に赤木直子たちは呼び出される。そしてチャールズは「君たち、地球平和のために、怪獣と戦ってくれ！」と命ずる。その言葉を聞いたOLの赤木直子は「女の私たちがなぜ怪獣と戦わないといけないの？」とチャールズに聞く。すると「たまには、女の子もいかなって思ってたね」とチャールズは言う。「それに君たちは、名前に色が入っているから選んだ」と続けて言った。すると紺野すみれが「ネイビーって、何？ブルーとかぶっているじゃない」というと、チャールズは「名前に桃という漢字が入った人がいなかったから」と言う。チャールズの言葉に五人は納得で

きなかったけど、ボランティアだ
 と思ひ怪獣退治を引き受ける。と
 はいっても五人は、特別な力がな
 い普通の女の子。だから、五人揃
 わないと怪獣を退治することな
 くてできなかった。特殊能力がない
 女子ーズの移動手段は、公共の交
 通機関。変身した姿で電車に乗っ
 て怪獣を追跡していると、電車の
 乗客達にコスプレイヤーに間違え
 られる始末。いちばん面白かった
 シーンは、ネイビーが集合に遅れ
 てきた時だ。五人揃わなければ怪
 獣を倒せないで、ネイビーが来
 るまで、なんと怪獣に戦うのを待
 っていてもらうのだ。そんな戦隊
 ヒーローいるか！と突っ込みたく
 なった。さらに遅れた理由が、メ

イクに時間がかかったということ
 だからこける。だけど、あとの四人
 は女の子にとつて、メイクは大事
 よねと納得する。そんな、ある夜
 のこと。普段は建設会社のOLを
 しているレッドの赤木直子が、仕
 事の帰り道でストーカーに出会う。
 でも赤木直子は、素手でストカー
 ーを退治してしまう。そのことで、
 赤木直子は自分に腕力が付いてき
 たことに驚くのだった。

敵で五人揃わないと倒せないとい
 ヤールズは言う。そんな日に限つ
 て、五人共予定があった。レッド
 の赤木直子は、自分が考えた企画
 のプレゼン。フリーターをしてい
 る、黄川田ゆりは、歩行者数を数
 えるバイトが入っていた。役者の
 緑山かのこは、翌日に初日を迎え
 る芝居の稽古をしていた。漫画オ
 タクの青田美佳は、好きな漫画に
 没頭していた。良家のお嬢さんの
 紺野すみれは、ホームパーティー
 でお客さんの接待をしていた。チ
 ヤールズからの指令を受けた赤木
 直子は、プレゼンを後輩に任せイ
 エロー・グリーン・ブルー・ネイ
 ビーの順に、いっしょに戦ってく
 れるように説得しに行く。イエロ

ーもレッドもブルーもネイビーも
 最初は、自分のことを優先してほ
 しいと言う。だが地球の危機だと
 気づき怪獣と戦う。そして、五人
 は力を合わせ、怪獣を倒す。一方
 赤木直子のプレゼンは、後輩の奮
 闘で成功する。やがて、地球に平
 和が訪れる5人の任務は終わる。は
 ちやめちやなストーリーだったけ
 れど、とても面白かった。

ある日のこと。赤木直子のケー
 タイに、チャールズから怪獣出現
 したという連絡がきた。個々に力
 をつけてきた五人は、この頃には
 怪獣が出現した日に予定がない人
 が退治することになっていた。し
 かし、この日に出現した怪獣は強

妹は、小林聡美)にもせむりに行く。
 妹は、しょうがない、どうしようも
 ない兄貴だとは思っているが、家族
 までは決定的に破たんするところ
 まではいかない。台風の一役。

そ放能は検出されぬが、東電か
 らの補償は18万円のみ。補償金は生
 産農家にのみ支払われるため、食
 べられない農産物を意味する。食
 産せざるを得なかった。父親は農
 がたちゆかないことを悲観して事
 直後、自殺してしまった。その後を
 息子さんとお母さんが引き継いで
 んばつてきた。

敏)がどら焼き屋をはじめる。老婆
 (樹木希林)がアルバイトをしたと
 やつてくる。年寄りのきつと最初
 は断るが、ある日老婆は自分で作
 たというあんをもってくる。それを
 なめてみるとういし。あん作りを
 50年やっていたと聞き、手伝つてもら
 う。朝早くから開店に間に合うよう
 いねいからあん作りをはじめる。こ
 んの二人に評判で店もお客さんが増
 える。この二人に母親とうまくい
 い孤獨な女子中学生がからむ。老婆
 に対しては、いっしょに中傷が店に陰
 におす。桜の咲く季節、葉桜などのカッ
 定場面が、いっしょに落ちついた、(流漂介)

●離婚した夫婦らを淡々と

「海よりもまだ深く」(監督＝是枝裕和)

淡々とした世界。離婚した夫婦(阿
 部寛、真木よう子)が小学生の息子(樹
 木希林)と団地で1人暮らしの祖母(樹木希林)の
 のところに台風の前泊する。離婚
 した夫婦は、祖母は、子供との
 関係は、祖母は、子供との
 元夫は小説の賞を昔取ったがその
 後鳴かず飛ばず、今は興信所で働
 ている。養育費を月5万円払わな
 ればならないが、ままならぬくら
 い借金病だ。競輪が趣味、堅実に
 欠けていた性格は死んだ父親譲り
 しい。息子に靴を買って父親譲り
 ざと汚れをつけて値切ったりする。

●原発事故を忘れてはいけない

「大地を受け継ぐ」(監督＝井上淳一)

ドキュメンタリー。原発事故で被
 害にあったある農家の跡取りが、東
 京からやって来た大学生たちと共に
 で原発事故後の痛切な話を始める。
 11)から4年。原発事故から65キロの距
 離にあるこの農家は放射能の被害を
 受けて、キャベツなどの農作物は出
 荷停止となった。会社勤めを付け
 と農業の手伝いに家に帰る。今でこ

●落ちついた人間ドラマ

「あん」(監督＝河瀬直美)

刑務所から帰ってきた男(成瀬正

ワクワクとゾックゾク

「テラフォーマーズ」

藤井陽子

ゴキブリマン対人型昆虫

観る前からワクワク。観ている最中も観終わった後も、そして今も、ワクワクとゾックゾクが継続中。それが、三池崇史監督のテラフォーマーズ。

前情報では、この映画を紹介していたFacebookのお友達達の投稿で「名だたる俳優陣が人型昆虫に変身して最強のゴキブリと戦う」という事だけでした。この、「虫に変身」という設定に私がスルーする自信も道理ありません。それくらい画期的で私好みの設定です。

この映画のストーリーについてウイキって調べた事をかいつまんで&ところどころ自分の言葉を交えて、出来るだけわかりやすく説明していきます。

まずこの映画は、火星を舞台に、超絶進化を遂げ巨大化したゴキブリを相手に特殊能力を身に付けた人類が戦う、わりとシリアスなSFバトル漫画が原作。

火星のテラフォーミングのために温暖化させる必要があり、苔と共に火星に放たれ、苔を食べて大繁殖したゴキブリ達は、人間大に成長し凶暴化していました。その風貌は、身長2m超え&筋骨隆々の二足歩行のまさしく「テラ」マツチョなゴキブリマン。

そんなテラフォーマーのゴキブリ達（感想文中では親しみを込めて「テラゴキちゃん」とでも呼びませう）を駆除するために、設定500年後の日本からチョイスされた14人の「ならず者」(偏った理由で、生きていても価値がないとか死んでも惜しくないとかいう烙印を勝手に押された人達)が、高額な報酬と引き換えに、その目的を知らされぬまま火星に送り込まれました。

火星まで来てしまったからには、

「郷に従え」の諺よろしく、言われるがまま昆虫のDNAを体内に注入し人型昆虫に変身。テラゴキちゃんと戦う使命を果たさんとしてます。モットーは、「虫をもつて虫を制す」！

人型昆虫になるには、人間に昆虫DNAを注入（移植）しなければなりません。その手術の後、昆虫細胞活性化剤を打つと、人間としての本来の能力とはまた別に昆虫の能力を発揮します。この、人間の英知を結集して作った人体改造手術は「バグズ手術」と呼ばれます。おぼけのテラゴキちゃんを倒しうる能力を獲得し、大量のテラゴキちゃんを駆逐していけるのです。これこそまさに、ゴキブリ退治。

更にネットで調べてみたところ、「バグズ手術」について次のような説明がありました。

「テラフォーマーの免疫寛容臓器移植術」及び「骨肉細胞における昆虫のDNA配列とのハイブリッド手術」の総称。火星環境での長時間任務を可能とするための手術で、昆虫のDNA配列を後天的に組み込み、軟弱な人間の骨肉細胞を昆虫のものに変化させる事が可能にした。単純に言えば、人に

虫の組織を植え付け、人体を虫に変態する事を可能にする手術。

うーん、かなり高度で複雑。難しい事は私にはよくわからないけど、とにかくにも、このバグズ手術を施した主人公たちは、いよいよテラゴキちゃんと戦う時には首筋に自ら昆虫のDNA活性化剤を打ち、虫人間に変身（へーんしん）！てことなのです。

さて、ここでようやく登場人物を紹介。バグズ手術を施されたのは以下の人達で、（）内には役者名及び手術ベースとなった昆虫名を記していきます。

まず、主人公の小町小吉（伊藤英明／オオスズメバチ）と、幼なじみの秋田奈々緒（武井咲／カイコガ）。（ちなみに、奈々緒と小吉は恋人同士だと勘違いしていたわたくし汗）

武藤仁（山下智久。以下、山P／サバクトビバッタ）。蛭間一郎（山田孝之／ネムリユスリカ）。ゴッド・リー（ケイン・コスギ／ミイデラゴミムシ）。森木明日香（菊地凜子／エメラルドゴキブリバチ）。堂島啓介（加藤雅也／パラポネラ）。大張美奈（小池栄子／ハナカマキリ）。大迫空衣（篠田麻里子／クロカタゾウムシ）。手塚俊治（滝藤賢



イラストも筆者

ありがたくもワクワクしたのは、変身シーンのたびに、その昆虫の映像と共に生体などの説明が勢いよくナレーションで入り、単純

一／メダカハネカクシ)。マリア・ビレン(太田莉菜／ニジイロクワガタ)。

その他、実写キャラ名及び役者名は調べてないけど、マイマイカブリ、ゲンゴロウ、オニヤンマといった手術ベースの昆虫がいました。

これら虫達の能力や体の特徴でインパクト大のものは後述するとして、この人の事も勿論紹介しないですね。

ストーリーの鍵を握る天才科学者、本多晃(小栗旬)。

彼の計算高さや冷徹さ、腹黒さなんかがそもそも問題だったのかもしませんが、本多博士を演じた小栗旬は、見た目バリバリのモード系。ポーカーフュイスも相まって、冷酷な雰囲気がとても出て

いました。ところどころでウケ狙いの言動やジェスチャーが目立つて、「ああ、観客を笑かそうとしてるに違いない」と思いつつ、狙い通りにその都度笑えました私は。

本編が始まってから、テラゴキちゃん(の怖さを予備知識で得ていた)ので実はずっと怖くてドキドキしていたため、クスツと笑ってその緊張を解きたかったのだ、ちょうどよかったんです。(館内で笑い声を上げる人は他にはいなかったのですが)

さて、この被手術者の登場人物達(変身した虫についてなので)が、例えばスズメバチとかバツタとかクワガタとかカマキリなどは虫に疎い私も知ってはいるわけですが、そこに珍しい学識名が加わると殆どの虫が初耳の名前、初見の姿でした。

に「へえー、こんな虫がいるんだー」とか「この人がこの凄そうな虫になるのかー」という興味がググッと強まりました。

そして、変身した人型昆虫の姿がまたみんなそれぞれかつこよくて、でもちゃんと虫っぽくてちょっと(いやかなり)グロイ特殊メイクがゾクゾク度を加速させ、スクリーンを見ていて、楽しくて仕方なかったのがあります。

自分こういうのが好きなんだなあ……としみじみ感じ入りました。

昆虫の意外な能力

これら虫達の能力は確かに、日常よく目にする身近な虫とは一線を画し特徴も飛び抜けているわけですが、中でも、ネムリユスリカとエメラルドゴキブリバチは、その生態と生命の神秘に度肝を抜かれるくらい驚愕でした。

まずネムリユスリカは「不死身の虫」「宇宙でも死なない生物」と言われているそうで、マイナス19.7℃の液体窒素に一週間漬けても、濃度100%のエタノール溶液に一週間漬けても、チューブに入れて90℃のお湯に一時間漬けても……それでもやっぱり死なない、と。更に仮死状態のユスリカに水

を数滴垂らせば元通りに蘇生する、と。

そしてエメラルドゴキブリバチはというと、こっちは悪い意味で真性のヤヴァイ虫です。大型ゴキブリ専門の狩人(狩虫?)で、ゴキブリを「ゾンビ化」と「奴隷化」させる、宝石のように美しい外見のハチです。ウィキって見たら、ゴキブリに「脳外科手術を施し」、神経細胞を一部破壊。あとは意のままに操るのだとか。巣穴に連れ込んだ生きたままのおとなしいゴキブリの腹部に卵を産みつけ(しかもゴキブリは1ダース分も狩って全てに産みつける)、孵化した幼虫はゴキブリの体内に移動し、内臓を食べ続けます。8日後、ゴキブリの体内でサナギになります。ゴキブリはようやく静かに息を引き取ります。それから4週間後、ゴキブリの体を乱暴に突き破って美しい成虫となって現れます。それが、エメラルドゴキブリバチ。

この菊地凛子演じる森木明日香の手術ベースの昆虫は、ネットで調べてみたら映画の50倍?はガクガクブルブルな生体でした。(しかし……なぜゴキブリ専門なの?ゴキブリだけ食べて成虫になるなら、中身はほぼほぼゴキブリだよな?)

?)

とにかく、世界にはまだまだまだまだまだ、知らない虫達が存在している事を改めて思い知らされます。一方テラゴキちゃんは、設定は設定としてすんなり受け入れるのですが、超絶進化を遂げた結果がなぜ人型テラマツチョな姿なのでせうね? (笑)

デカい、黒い、強すぎ。容赦ない、ハンパない。ついでに感情もないので、ほんとに不穏で不気味な存在ですが、じっと見ていると思わず吹いてしまう顔立ちをしていたりします。ボスみたいな奴が吠えた時、遠くにいたテラゴキちゃん達が一斉に耳元に両手をかざし、野々村○太郎のごとく耳を澄ませるシーンも、笑うしかなかった。

ところで序盤、火星に降り立ってすぐにテラゴキちゃんと遭遇してしまった小吉と奈々緒ですが、瞬間移動して近づいてきたテラゴキちゃんと奈々緒は唐突に首をへし折られ瞬殺されてしまいました。そんなテラゴキちゃんに驚きと怒りが爆発した小吉が放った言葉は、「何やってんだてめえ……!」というまさかの軽めのリアクション。大事な幼なじみ(彼女だと勘

違いしてしまいましたけど私は)を殺されて言う言葉つか(笑)

息を飲むシーンだったのに、なんだか重篤な空気が和らぎました。

滝藤賢一の怪演

さて、ここで、「昆虫細胞活性化剤」について1つだけ補足しておきます。

これ、ちよんこずいて(＝調子に乗って)打ちすぎると、その昆虫のまま人間に戻れなくなってしまうので、使い方に慎重になる必要があります。テラゴキちゃんにやられる命の危険を回避しようと強くなるために打ちまくと、人間をやめなくてはならなくなるリスクを伴います。

こうした説明が本多博士の口からなされた時、「きつと誰か1人くらいは、打ちすぎて人間に戻れなくなるんだろうな」と自動的に予想されました。

「ああ……山Pだったか……」(私の心の声)。シニカルで冷めた感じの山P演じる仁ですが、彼がテラゴキちゃんと戦闘真つ只中で、「俺より強い奴がいるなんて許さねえ」と、戦闘モードMAXのちメーターを振り切り、何度も打ってしまったのです。

このあたりの一連のシーンもゾックゾクしました。他のメンバーが虫人間になってすぐに次々と秒殺・瞬殺されていく中(※最後まで生き残るメンバーもいます!)、山Pは健闘しました。しかし引き換えに、小吉の制止もむなしく、最期は、サブクトビバッタそのものの姿でさようなら……でした。

映画館に観に行く前、この映画をFacebookで紹介していた人が「ゴキブリ特有のグロさ」をおっしゃっていました。

確かにそれはそうですし、実際に観て、テラゴキちゃんの不気味さと怖さも十分に実感しました。でも、私にはもはやそんなグロさや怖さは途中からミジンコも気にならなくなっていたのです。

そう、滝藤賢一演じる手塚俊治が人型昆虫メダカハネカクシになった瞬間から。ウイキつても、メダカハネカクシ自体はさしてズバ抜けたポイントはないように思えたのですが、滝藤さんの人型昆虫の姿は、何よりも一番の恐怖でした。四つん這いになって、口からゴボツとエイリアンみたいにヌメヌメした管を出して、ほっぺがこれでもかと膨張したかと思うと有り得ない量の炎を延々噴射し続け

る、メダカ「滝藤」ハネカクシ。

てつきりCGでほっぺを膨らませたと思っていたのに、ほっぺの両側にミニ風船を詰め込んだリアルな滝藤さんの顔だった事を後日知りました。そんな事が可能なのか……。メダカハネカクシの時の、四つん這いの姿勢とそのリアルフェイス(?)は、トラウマ級の怖さでしになく、内心ブルブル震えていました。他のメンバーは虫に変身してますますかっこよく魅力的な怖さを醸し出していたのに、滝藤さんは私の心にひたすら恐怖だけを植え付けました。思い返せばこの人は虫人間になる前からヤバイ人の役で、テラゴキちゃんにやられる最期までずっと印象的極まりない怖さでした。

一部友人からは「超駄作と評判の映画をわざわざ観に行つたのか」と小ばかにされもしましたが、私にとつては最高に面白い映画でした。

怖いのに面白くて、かっこよくて、ワクワクゾックゾクの、自分好みの作品でした。映画館の大きなスクリーンで観て、余計に怖さもかっこよさも楽しめて、ひたすら面白い映画でした。DVDが出たら買うと思います。

N雄とN子のシネマ対談

『シェーン』

伝説的な西部劇！
「シェーン!カムバック」デジタルリマスター版で鮮やかに蘇った
『シェーン』は、やはり名作だった。

たが、音楽の音量がやや高めと思
ったが。」

N子「当時は、このくらいの音量
だったんじゃないかな。」

N雄「アラン・ラッドが、一世一
代の演技をみせているのも注目し
ないと。」

N子「もう、なりきってるよね。
彼って、他の作品では目立ってな
いが、これは例外。拳銃で生き抜
いてきた男にしては、逆にやさし
い眼差しをしているのがいい。」

N雄「キャラが魅力的だよ。自分
の時代、つまりガンマンの時代は
終わったことも、わきまえてるし
な。哀愁があるよ。」

N子「話の基本は、開拓民と悪徳
牧場主の争いなんだけど、そこに
シェーンがからんでくる単純なス
トーリー。」

N雄「彼が馬に乗って最初に登場
するシーンがいいな。少年がじっ
と見ている。」

N子「出会った少年にシェーンが、
私は物事をまっすぐ見る人が大好

きだつて言うんだよね。あそこで、
ぐつときてしまう。」

N雄「ちゃんと、ひとりの人間と
して観ている。子供扱いをしてな
い。」

N子「シェーンは〈流れ者〉なん
だけど、乱暴者ではなく穏やかで
物腰が柔らかい。あれでは、みん
なが好きになるよね。」

N雄「夫スターレット(ヴァン・
ヘフリン)も密かにシェーンに惹
かれる妻マリアン(ジーン・アー
サー)も、そしてその息子ジョー
イ(ブランドン・デ・ワイルド)
もな、みんな好意を持ってしま
う。」

N子「この3人の気持ち、それ
ぞれよく描かれてて、ある種のホ
ームドラマにもなってるね。」

N雄「ここに落ち着こうかと、ち
よっと揺れるシェーンの気持ちも
が、また見せてくれる。」

N子「マリアンがジョーイに彼を
好きにならないようにと、好きに
なると別れが辛いからと言いつ

せるシーンは泣かせたね。」

N雄「さらに、シェーンにはちよ
つと暗い過去みたいのが漂ってい
て、役柄的には申し分ないんだ
な。」

N子「時代に取り残された感じも
出てたよね。日本の時代劇(股旅
物)に通じるムードがあつたんじ
やないのかな。」

N雄「今回、見直してみると、シ
ェーンに憧れる少年を演じたワイ
ルドがなかなか良いことに気がつ
いたよ。」

N子「あまり可愛いくないのが良
かった。彼のシェーンに対する熱
い気持ちが良くわかったね。」

N雄「だから、彼と同じようなベ
ルトをした。たぶん、真似て作
ったんだと思う。拳銃も作り物だ
ったしね。子供だから、早打ちと
か、ガンマンへのあこがれとかが
あるからな。」

N子「少年にとってシェーンは、
ヒーローなんだよね。強いものに
惹かれるから。」

N雄「これは63年前(1953年
10月公開)の伝説的な西部劇。数
ある西部劇のなかでも、ベスト3
に入る作品だよ。」

N子「西部劇ファンで、これを見
なくちゃ西部劇を語る資格なし!
という噂があるみたい。」

N雄「当然。もはや名作で古典だ
よ、これは。もう5、6回以上は
観てる。」

N子「今回、デジタルリマスター
版の公開だったので、画面は鮮明
で、音質もクリアだった。とて
もそんな古い作品には見えなかつ
たね。」

N雄「セリフもはつきり聞き取れ

N雄「シェーンが殴り合うところを真剣にじっと見てる少年、あの辺の気持ちわかるよ。」

N子「でも、彼はあてのない旅を



『シェーン』左からブランドン・デ・ワイルド、ジョン・アーサー、ヴァン・ヘフリン、アラン・ラッド

続ける運命。だって自分の居場所がどこにもないわけだからね。孤独な人生だよ。」

N雄「シェーンは、ここで3人を守ろうかと言う気持ちも、あったかもしれないな。」

N子「でも、無理だよ。一か所に止まるなんて。所詮はさすらい人なんだから。マリアンのこともあるしね。夫も気が付いてたから。」

N雄「殺し屋のジャック・パランズが異様な雰囲気だしてる。黒ずくめの衣装で。」

N子「彼とシェーンの決斗シーンは語り草になってる。拳銃を抜くのが一瞬、シェーンの方が早いんだけど、あつという間だったね。」

N雄「0.6秒の早撃ちだった。」

撃ち合いまでの持つて行き方が上手かったな。馬上のシェーンを追うジョーイと犬をたたみかけてつないでた。」

N子「ちゃんとジョーイに戦いを見せるためにね。」

N雄「シェーンが撃たれそうになった時、声をかけたのが少年だったからな。」

N子「教えなかったら、シェーンは死んでたかもしれない。ちょっと傷を負ったようだけど。」

N雄「血が出てるといつてたが、深手ではないようだった。」

N子「最後は泣かせるね。ジョーイの叫び声がこだまして。絵に書いたようなラストシーンだった。」

N雄「けつこう暗めの風景の中にシェーンが消えて行く。あの暗さ

がなんとも言えないよ。」

N子「シェーンが馬に乗る姿勢がいいよ。胸を張ってね。キマってる。」

N雄「振り返りもせず去っていく。少年はあの後ろ姿は忘れないだろうな。」

N子「あの後、シェーンは野垂れ死にするしかないかな。そんな幕切れだった。」

N雄「シェーン死亡説があるらしいよ。撃たれていて、片手が力なく伸びてるし、墓場の側を通過して行くのですね。」

N子「最後、少年に『強くまっすぐな男になれ』って。なんともカッコイイ捨て台詞だったね。」

〈2016.4.9〉

* N雄 (90点) N子 (90点)

メキシコ麻薬戦争を描いた3本メキシコの麻薬がらみの犯罪は泥沼状態、底なしだ。話題のドキュメントとドラマを相次いで見た。

『皆殺しのバラッド メキシコ麻薬戦争の光と影』(シヤウル・シユワルツ監督)。ドキュメンタリー。メキシコと接するアメリカでは麻薬マフィアをテーマにした流行歌が人気だ。

メキシコでは麻薬がらみの殺人が後を絶たない。政府には麻薬マフィアを撲滅しようという気はないようだが、警察も殺人があつても現場検証だけ

で殺人犯を追いかけるようではない。警官も殺害の対象になっており、本腰を入れて捜査にあたれないのだ。同じくドキュメント、「カルテル・ランド」(マシユー・ハインマン監督)。

今まで麻薬がらみで12万人が殺された。首吊りの死体や切られた首が町の中にさらされている。対マフィアから身を守るために自警団が銃を持つて立ち上がった。リーダーは医者。彼は当初は英雄扱いだったが……自警団がマフィアを捕まえても警察は釈放してしまうような状況。そのうち、自警団員のなかにもマフィア

と同じようなことをする人間が現れる——人の家に土足で入り込んで泥棒の真似をする(自警団を混乱させるためにマフィアが紛れ込んでいるケースもあるようだ。住民たちは自警団が町を守るというても信用しなくなる。政府も自警団の武装解除を要求してくる。団員のなかにはそうした状況に嫌気がさして警察の一員になってしまふ。こうしてリーダーは追いつめられ、自分の身も危うくなり、最後は牢獄に。

もう一本はドラマ。『ボーダーライン』(ドゥニ・ヴィルヌーヴ監督)。

麻薬マフィアのボスを抑えようとする作戦が描かれる。CIAは単独行動が許されないらしい。そこでFBIの優秀な女捜査官(エミリー・ブランド)を引き込んで作戦に向かう。妻子をマフィアに殺されたメキシコの元検察官(ベニチオ・デル・トロ)が復讐に燃えている。国の機関が人殺しに手を貸す話だ。問題を解決するには少々荒っぽいこともやらなくちゃならないのかもしれない。何でも力で解決するのはアメリカの得意技だが……。

(せ)

ある反戦・反核女優

鈴木輝夫

仁義は尽している——。青息吐

息の氣息奄々たる破れた仁義ではあるのだが……。他でもない『シネマ気球』前号に書いた、例の『東映任侠映画 傑作コレクション』の事である。この原稿を書いている時点で都合三十九号まで出ている。総て購入したし総て繰り返し見た。確かに、鶴田浩二は沸き上がる情念で限りなく悲しいテロルを決然として決行するし、高倉健は何人も敵わない鋼の肉体を持って数十人を惨殺するし、藤純子は女の情愛を無理やり埋没させて漢となり羅刹女の如く斬り結ぶ。昔

と同様、彼らは何ひとつ変りなく無惨極まるテロルを繰り返している。当り前だ。彼らは映画の中でずっとそのまま生き続けているのであるから。

見る私の方は当然として歳を取り、文句なしの全くのジジイである。若い時に夢中になった映画を再び見る事は、ある種、堪らない残酷さと耐え難い無惨さを運び込む。何せフィルムに記憶されている彼らは、全きその当時のままで生きているのだから。

仁義としてそれらの映画を見ている私の脳裏に浮かぶ、最大にして最高の属性は、取りも直さず「懐かしい」と称される感情に満ち満ちて行く。旧懐の情は黙し難く、その感情その物が陰々滅々として我を責め続ける。その様な状態になるであろう事は、この東映任侠映画群を見る前から半ば判っていたのであるが、案の定その様になり、唯今の私は懊悩の渦中で感乱の大波に漂っている。

年月が経れば何事も懐かしい思いに捕らわれるのは、生身の人間として理の当然であり、別段、それ自体は決して悪しき事ではないのだし、況してや、若い日に見た映画などは尤も旧懐の情を呼び起

す代物であろう。

であるのだが、私に取って映画一般なら旧懐の情に諾々として闊然しても一向に構わない。が、殊、東映任侠映画に就いては、それでは断乎として困るのである。若き日、東映任侠映画から「馬鹿馬鹿しい崇高さ」を学ばせて貰った。それは「偉大なる思想」であった。爾来、私の中で「馬鹿馬鹿しい偉大なる思想」は、煥然として点灯し続けている筈であった。生き様を規程せしめた東映ヤクザ映画。東映ヤクザ映画は言わば「思念の核」なのであり、更に申さば「己を己たらしめている存在その物」でもあるのだ。

それが懐かしさと称される属性の直中に脆くも溶解し様とは——。私に取って東映ヤクザ映画なる作品群は、映画であつて映画ではない。「高邁なる思想」——。その思想が懐かしさの直中に脆くも溶解し様とは……。先に記した様に、これが他の映画であるのなら旧懐の情に沈もうが一向に構わないし、寧ろ、そうなるのが自然であり人間の素直な情感の発露としては好ましいとさえ思う。

だが、東映ヤクザ映画だけはそれでは絶対に駄目だ。私は決然と

して自縛の鉄鎖を、断ち切らなければならぬ。己が己である為の思想を取り戻す為に、そして、自己を自己たらしめる為にも——。私は彼らに因つて与えられた「思想」を、真に血肉化しなければならぬ。それこそが御身らに仁義を尽す本当の意味なのである。

昨年の暮れ、関田編集長とちよつとした行き違いがあつた。別段、お互いに何蟠りもないので、その顛末を有り体に記す。発端は彼からの一通の手紙に由来する。昨年の国会で与野党間でさんざつばら揉めに揉めた、例の「安保法制」に反対の署名をして欲しいとの依頼であつた。私は与党の案にも大きな欠陥が認められ、必ずしも全面的に賛成ではないのだが、基本的にはその様な安保法制が必要だと考えている。『シネマ気球』に書く可き映画論とは直接関係がないので、極々端折って簡単に書く。

幕末、ふと気付くと、我が国は累卵の危機に見舞われていた。帝国土主義列強はアジア諸国を次々と植民地にし、その魔の手を今や日本にまで伸ばそうとしていた。帝

国主義化する事で帝国主義列強と対峙。弱小国家日本はそうする事で国家の独立を維持し様とした。幾多の戦争や事変を経て、昭和二十年、イギリスの衣鉢を継いだ新興国アメリカに完膚なきまでに敗れた。爾来七十年。以降、日本人はリアルに世界情勢を見る眼をなぜか失って仕舞った様に思う。平和への願望だけでは平和は守れないのだ。

日本帝国の息の根を完全に止めたのは、広島と長崎に投下された二発の原子爆弾であった。そのにつつきアメリカの首魁が広島を訪れた。バラク・オバマは何故に広島を訪れたのか？ 恐らく、アメリカ政府、日本政府、更にはオバマ大統領自身にも、それぞれ多大なる思惑があつたのだろう。勿論、安倍総理にも。そして大方の事前の予想通り、オバマ大統領はアメリカ軍に因る原爆投下を謝罪しなかった。それを残念に思う人は、当然の被爆者達を始めとして日本人には数多くいただろう。オバマが謝罪と取られる文言を最大限の注意深さで回避したのは、アメリカの退役軍人協会を始めとする自国

民の世論を第一に慮った事と、歴代の大統領が原爆投下を一切謝罪してこなかった事に配慮しての事であろう。恐らく、誰が大統領になろうとも、これからもアメリカは公式には謝罪しないだろう。それは政治的には全き正しい!! 国家は謝罪してはいけないのである――。

国家が他国に謝罪すれば、立ち所に崩壊の危機を招くであろう。運良く崩壊しないまでもその国家は危殆の状態に瀕し、やがては倒壊の道への大きな一歩となり果てる。待て、待て。アメリカの立場を戦略的に慮るのは必要な事ではあるが、私は飽く迄も日本人だ。断言する。原爆投下は明らかにハーグ平和条約違反である――。更に言わば、東京大空襲を始めとした日本の各都市への空爆もだ。昭和二十年三月十日未明の東京への空襲では、一般の人々十万人以上が死亡し、下町を中心に消失家屋は二十六万戸に及んだ。広島と長崎の原爆投下では三十五万人。そして数知れない原爆の後遺症に呻吟する被爆者達。無辜の民への無差別爆襲や残虐極まる原爆投下など、明らかに条約違反である。正に犯罪である。故か、「原爆赦すま

じ」の平和運動は日本中に満ち満ちている。私も基本的には、それに賛同する事に吝かではない。

唯、それは余りにも「政治性」を帯びて仕舞った。「党派性」と言い変えても良い。私はそこら辺りにある種の違和感を感じざるを得ず、であるから、一歩も二歩も下がった所で見続けている。些か旧聞に属する話で恐縮なのだが、三島由紀夫は昭和四十二年（戦後から二十二年が経っている）、当時の週刊朝日に次の様に書いている。

私の中のヒロシマ――原爆の日によせて

ヒロシマ。ナチのユダヤ人虐殺。まぎれもなくそれは史上、二大残虐行為である。だが、日本人は「過ちは二度とくりかえしません」といった。原爆に対する日本人の民族的憤激を正當に表現した文字は、終戦の詔勅の「五内為に裂く」という一節以外に、私は知らない。

そのかわり日本人は、八月十五日を転機に最大の屈辱を最大の誇りに切りかえるという奇妙な転換をやつてのけた。

一つはおのれの傷口を誇りにする「ヒロシマ平和運動」であり、もう一つは東京オリンピックに象徴される工業力誇示である。だが、そのことで民族的憤激は解決したことになるだろうか。

三島はこの文章の冒頭で次の様にも記す。

戦後二十二年間、私は原爆について発言しなかった。昨年「ニューヨーク・タイムス」から広島ルポを依頼されたときも断つた。第一に、原爆に関しては、体験した者と体験しない者、被爆者と被爆しなかった者という二つの立場以外絶対ありえないからだ。これがバトナム論などと根本的に違う点であり、そのことを忘れた発言はすべてウソである。被爆しなかった者が、いくら「おかawaiiそうに」と同情してみせても。そんなことで心慰められる被爆者は一人もない。

この文章が書かれた当時、恐らく大いなる非難の声が上がったで

あろう事は容易に想像されるし、今始めて眼にした人々の中にも怒りの大声を上げる者達は数多いであろう。この本は平成二十七年十月に徳間書店から、『終わり方の美学 戦後ニッポン論考』(高丘卓編)と題されて出版された。三島が様々な所で書いた評論を纏めた物であり、言わば、戦後日本の様々な事象を、三島流の佳麗かつ皮肉的なレトリックを持って論考した物である。〔私の中のヒロシマ〕と題されたこの一論は、始めて眼を通した。

三島由紀夫は実に厄介である。私の悪い頭で、三島の綺麗ざらしくも難解極まる文章の真なる意味を咀嚼するのにも悪戦苦闘するし、縦^よんばそれが出来たとしても、小説や評論に内在している彼の言いたかった本質を理解し得たのかどうかも覚束ない。三島は一筋縄では捕え切れない言わば癖者(曲者。この漢字の方が当たっているか……)で、彼の本願が那邊にあるのか、心酔者を始めとして読者一般も少しば惑乱させる。三島は三島で却ってそれを面白がる節が見受けられたのだが……。その様な事を思考して先の三島の「ヒロシマ平和運動」の文言を再考する時、字

面から沸き上がる意味と全く相異なる意味性が浮上するかも知れない。

が、ここではもう三島の核兵器や広島平和運動の論考を、あまたこうだと解釈し様とするのは止す。私が長々と被爆地広島を訪れたオバマ大統領や三島の論考を書いたのは、一人の有名女優の「反核運動」に就いて記したいが為である。世界一権力を持つている現役のアメリカ大統領と世に鳴り響く世界的文豪には、誠に申し訳ないのだが、有名女優の前座(!!)を敢えて務めて貰った。「核寄席」の大取りは、今、日本で一、二を争う押しも押されもしない大女優。真打登場。その名は吉永小百合。

今年の二月、然る保守系の月刊論壇誌に、一人の文芸評論家の興味深い大女優・吉永小百合に対する「付け文」が掲載された。付け文、即ちラブ・レター。私は中学生や高校生が普通に使う和英辞典や英和辞典しか持っていないし、もつと語彙の多く載る大辞典を所有していないので、果して英語にはラブ・レターと同意語がほかにあるのか恥ずかしながら知らないのだが、日本語には色々あってその都度、微妙なニュアンスで使い

分けが出来る。付け文、恋文、懸想文、艶書。不勉強な私はこれぐらしいし知らない。

保守系の論壇誌に掲載された文芸評論家の一文は、私の感覚では付け文がびつたりするので、敢えて付け文と記した。決して甘い甘い恋文ではなく、可成り大辛な付け文ではあるのだが……。先ずその題名から「吉永小百合さんへの手紙「平和」を愛すればこそ」

——類い稀な自らの資質も、原爆詩の朗読をも、貴女は裏切っている—— 付け文を書いた人物

私は文芸評論家である小川榮太郎。私は文芸評論家や作家の書いた映画評論や映像論や俳優論が一般的に苦手だ。難解な言回しを十全には理解出来ないし、使われている語彙の真なる意味も全く判らない時もある。私の様な並以下の読解力や知識しか持たない者には、彼らの記述する晦渋な文章は大いなる鬼門と称しても差し支えないが、今回の「吉永小百合さんへの手紙」は十分に楽しめたし、更に言えば、我が意を得たりと拍手の一つも送りたくなった。

まあ、数多くいる吉永小百合ファンや彼女を熱烈に支持している政治勢力からは、総反撥を食らう

のだけは間違いないであろうが……。小川榮太郎は、最初に「吉永小百合さん、この一文を手紙形式でしたためたのは、貴女に実際に読んで頂きたいからです」と記す。そして小川は、吉永の女優としての類まれな才能への絶大なるオマージュを、縷々として述べて行く。やれ、その眼が良いのその声が好きだの、若き時の吉永の生命力が、そのまま演劇を凌駕して仕舞う生きたままの姿の魅力が凄いのと、女優・吉永小百合への手放しの讃辞。危ない、極めて危ない小百合サン——。海千山千の文芸評論家が口を極めて最大級に誉め上げる時、その裏側には必ずや何か隠されており、間違いない「腹に一物」の筈だ。クワバラ、クワバラ——。

彼は先ず、昭和三十七年度に公開された『キューポラのある街』に就いて論を展開する。吉永は埼玉県川口市にある鋳物工場で働く、飲んだくれの職工(東野英治郎)の中学三年生の娘を演じているのだが、当時の吉永は十七歳であった。監督は浦山桐郎。浦山桐郎は吉永とは数多くの作品で組んでいる。

小川のこの作品への評価は、あ

種の辛辣な皮肉を孕みながらも、極めて高い点を与えているのだ。特に、十七歳の少女であった吉永の演技に就いては、絶賛に近い評価をしている。この映画の私の感想を一口で言わば、この少女の賢しら口が何とも嫌みたらしかったのである。

小川は用意周到な手順で強烈なる皮肉の隠し味を絡ませ、『キューポラのある街』の吉永の存在感ある演技を論じ、次のターゲットの映画、『伊豆の踊子』へと『魔手』を伸ばす。この映画でも吉永の存在感を、『キューポラのある街』と同様、いや、それ以上に絶讃する。

『伊豆の踊子』は各時代のスター女優に因って、何回も映画化されているのだが、小川は歴代演じた女優達の中でも、原作者の川端康成の心に一番適った踊子象は、吉永小百合であったであろうと断言する。川端は伊豆・湯ヶ野の撮影現場をわざわざ訪れ、吉永の傍からずっと離れなかったのは有名なエピソードとも記している。私も吉永のこの映画を見ているが、そんなエピソードがあったのは全く知らなかった。他の女優が主演した作品も初代の田中絹代版だけは流石に見てはいないが、他の版は山

口百恵版まで歴代見ている。歴代の踊子像で私に強烈な印象を残したのは、何回目かに映画化された内藤洋子が演じた踊子で、他の版と全く違う全体を貫く陰気その物の異様さと、主人公の踊子と一高生(語り、若き日の川端康成)の最初から最後まで終始漂う、陰鬱さを孕んだ遣り切れないさは、見ているこっちの方まで陰々滅々たる感情に墜し込まれる。が、大傑作であった。踊子は内藤洋子。一高生は黒沢年男。監督は恩地日出夫。東宝作品。

恐らく、伊豆の旅に出た一高生、語り若き日の川端康成は恩地日出夫版のこの映画の様に、その全身に常として沈鬱さを湛えていた青年であり、途中で連れになる旅芸人一家の踊子も、内藤洋子の演じた如くの暗く沈んだ鄙びた少女であったであろう。その意味で、恩地版は「実際の川端と実際の踊子」に近い。私は恩地監督の蛮勇に感心する。

『伊豆の踊子』を映画化する時、各社はアイドルのスター女優を踊子役に必ず使うだろうし、そうすれば必然として踊子は、健康的で眩しい明るさに満ち溢れ、その上に涙ぐましい健気さ横溢していな

ければならない。映画は興行なのである。金を稼がなければ御マンマの食い上げである。鰐淵晴子版、美空ひばり版、山口百恵版、勿論、この吉永小百合版もその範疇からは決して免れない。唯一の例外は内藤洋子版だけである。再び書くがこれは歴代の『伊豆の踊子』の中で、最高の傑作であると思っている。この原稿を書いている時、ふと余計な事を考えて仕舞った。果して今、『伊豆の踊子』を映画化するなら、誰が主人公の少女役を演じるのだろうか？ 彼のAKB48の誰かが最有力候補なのだろうが、悲しい哉、オジサンたる私は誰が誰やら全く知らない……。そこで幼気な少女達に、老婆心ながら一言、「秋元某を始めとするあざとい回りの大人達に、呉々も騙されめさるなよ」と。

話が脱線した。元に戻す。小川榮太郎は文芸評論家だけに、本業である大作家・川端康成の興味深い「女性観」に就いても論じている。川端が当時十八歳だった吉永の傍から離れなかった有名なエピソードを先に取り上げたが、これを以前から言われていた(川端の少女趣味)「私は知らなかったが……」と、侮る訳には出来ない逸

話だと書く。そして次の様に指摘する。原文をそのまま写す。

川端といふ人は、女性の美と醜惡とに対して、普通では考へられない異常な鋭敏な眼と、異様な妄執を持つてゐました。

私見であるが、別段、川端のその様な性癖は奇異とは思わない。殊に大作家と称される仁には、そんな人が多くいる。谷崎潤一郎、永井荷風、小島政二郎、吉行淳之介……。言わば、その様なエトスがあるからこそ、己の文章が書いて小説が小説として成立するのである。小川は更に次の様にも記す。再度原文を引用する。

少女の中には、大人の女になつたら失はれてしまうやうな強さと、そして叡智がある。普通ならば、十八歳といふ年齢は女から、さういふ処女性を奪ふ年です。ところが十八歳の吉永さんの中には、寧ろ、時は今ぞとばかり、大人と永遠の処女性の同居といふ奇跡が輝いてゐた。川端はそれに喜びを覚えつつ、おそらく彼の破れた初恋を思ひ出し、衝

撃を受けたのではなかったで
せうか。

私に言わせれば、小川に因る吉永の踊子論は、文芸評論家なればこそ物した文章と言える。特に(大人と永遠の処女性の同居といふ奇跡が輝いてゐた)などの一文は、女優・吉永小百合の真骨頂を見事なまでに喝破している。まあ、それに匹敵出来るのは、先頃亡くなった彼の原節子ぐらいか……。吉永のベタ誉めは更に過剰さを増す。

三十歳前後までの貴女の演技は、僅かなセリフだけしか与へられてゐない時でも、表情の変化だけで、心の急速な変化を表現する瞬発力に溢れてゐました。

日本の女優史の中では、さういふ心理的な運動神経のよさを自然に演戯できる人は、吉永さん以前には余りゐなかったのではないのでせうか。

正に熱烈なる「付け文」である。所で私であるが、吉永小百合の映画は余り多く見てはいない。私が狂った様に映画を見始めたのは上京した学生時代からであつたが、

秋、恰も「70年安保闘争」の真っ最中。学園は大荒れであつた。所謂「全共闘」は全国の学園に燎原の火の如く拡大し、街頭は毎日毎日ヘルメット姿のデモ隊で騒然たる状況を呈していた。安保が何であるのかも確とは判らずに、運動の回りであらゆるよろしい。今となつては恥ずかしながらと書かなければならないのだが、当時は飽く迄も真剣その物——。

慙愧の念、殊更深し……。細々した事は敢えて書かないが、当然、全共闘なのであるから日本共産党の青年組織である「民青」とは激しく対立し、しばしばゲバルトに発展したが、ヤクザ映画の鶴田や健の様には行かず(当り前か……)、小競り合いを繰り返した後、お互いの持つ携帯マイクで口を極めて罵り合うのが落ちだった。

全学共闘会議に結集する学生達に取つて、民青(正式な名称は「日本民主青年同盟」)は正に不倶戴天の敵であり、文字通り、俱に天を戴かずの關係であつた。その頃、吉永小百合は「民青のアイドル」と称されていた。吉永が真に彼達のアイドルだったのかどうか本当の所は良くは判らないのだが、当時、彼女の出演した映画の多くは、

正に民青に属する彼達が共感して大拍手しそうなテーマを扱つていた。「民青のアイドル 吉永小百合像」はそれ以後、私の頭の中に長らく残存し続けた。

書き散らしたこの愚論も、そろそろ締めに入らなければならない。小川榮太郎は演戯者としての吉永をさんざつばら誉め上げたのだが、先に書いた様にこれは一種の「誉め殺し」なのであり、最後には彼女を「地獄の底」へと突き墜す「奸計」なのである。彼は吉永の最新の映画である『ふしぎな岬の物語』にと論を及ぼす。この映画では、吉永は主演と同時にプロデュースもしている。八面六臂の大活躍。糅て加えて、平成二十六年、モントリオール映画祭の審査員特別大賞を受賞した。バンバンザイと素直に喜びたい所であるのだが、小川は『ふしぎな岬の物語』の吉永を散々に切る。

この、ある意味で、宮崎駿さんの無重力的ユートピア世界と最近のある種のヨーロッパ映画——成熟を乗り越えて、ヨーロッパ文明の終焉を思はせるやうな静か過ぎる佇まい

——の混淆のやうな映画空間は、夢幻劇としては十分に美しく、愉しかった。

何時もの高評価。この映画では吉永は岬の突端にある喫茶店の女主人を演じているのだが、絵描きの夫は何十年も前に亡くなり、未亡人が営むその喫茶店は村人達多くの魂の安らぎの場となっている。それは女主人の優しさ故である。

また、宮崎駿の一連のアニメ映画を、「無重力的ユートピア世界」と一言で断定したのも卓見で、私がかねがねそれに近い感を持つて彼のアニメ映画を見た。

吉永がプロデュースして主演し、更には海外の映画祭で賞まで得たこの映画を、ある種の夢幻劇として十分に美しくかつ又愉しかったと高評価を下した小川は、先例の如くここからややら刃を研いで吉永に切りかかる。先ず、この映画は何かが居心地が悪く、或いは、居心地が良過ぎて居心地が悪いと言いたくなる様な違和感を感じると記す。判る。ヒューマニズムこそあれば「世界は全面的に良き世界に変革出来る」——。昔から、殊に戦後からはその様に堅く信じ込んでいる人々が数多くいるのも、

偽らざる事実である。特に我が日本国では。嗚呼、金科玉条たるヒューマニズム。

主演の吉永を始めとして出演している誰もが、考えられない様なヒューマニティー溢れる、正に、絵に描いた様なヒューマニストばかり。更に小川は問う。この映画の全体は、一体、日本なのか非日本なのか。そして、この映画は余りにも日本に依存しているのに、それを観客に徹底的に忘れさせて仕舞う、と。それが大きな問題であり、この映画には最初から孤独はなく、共同体の安らぎが保証されておき、死の恐怖はなく、死者との共存があり、最初から懷疑はなく、受容と情愛がある、と。これは民俗学者の泰斗、彼の柳田國男の拾い上げて論じた世界であり、「日本」と言った堅牢な觀念なしには成立しない美の世界なのであると、小川は力説する。然るに、この『ふしぎな岬の物語』なる映画は、それら日本独自の死生観や優しく育まれた共同体に根差しながら、摩訶不思議にもこの映画の存在基盤であるそれらを破壊するイデオロギーを内包している、と書く。

要するに、「日本その物に依存し

なければ存在し得ない」映画なのに、その内側に「日本その物を否定」するイデオロギーを強烈に内包させている、とでも言うのであるのか。保守派を自認する文芸評論家だけあって、日本独自の文化総体に依拠しなければ成り立ち得ないテーマの映画であるのに、その実、有ろう事か、映画の中でそれを全否定するが如きの、嫌悪す可き映画に何故かしら仕上がっている、と主張しているのだ。

小川が次に満を持して切るのは、「吉永の原爆詩朗読」である。恐らく、この「吉永小百合さんへの手紙」「平和」を愛すればこその中、小川が吉永に対して一番言いたかった事であつただろう。この論の白眉と言つて良い。多くの人は吉永の原爆詩朗読に対して鑽仰の声を上げるだろうし、吉永自身も今ではそれを真摯に己のライフ・テーマと自覚した感がある。事実、反核運動や反戦平和運動をする団体からは、吉永の原爆詩朗読への圧倒的な支持の声が上がっている。

反核兵器運動や反戦平和運動などと言わば「絶対正義」であり、若し、これに少しでも疑問点や問題点などを指摘し様ものなら、立

ち所に糾弾されて袋叩きに晒されるのは必定である。私は今盛んに騒がれている「言論の自由・報道の自由」問題と全く逆の意味で、そこに「言論空間の不可思議な歪み」を感じるのだが……。誰もが反対出来ない絶対正義を声高に振り翳して、絶対的な態度で糞味噌に指弾するのが、果して「正義に合う」行いなのか？ 小川榮太郎が吉永の原爆詩朗読に「難癖を付ける」のも、私が今書いた様な事に通底しているのを感じたからであろう。先ず最初、例の如くに吉永を誉め上げる。

原爆といふ主題に、貴女のやうな真面目でイノセントな女性が強ひ痛みを抱いたといふことを、私は素直に理解できます。そして、女優として、一人の人間として、それを形にし、伝へたいといふ思ひも理解できる。

小川は原爆詩朗読と言う「祈り」の純粹性に最大限の讃辞を送り、吉永の善意に就いては微塵の疑いも抱いてはいない。更に、今日に於ける核兵器廃絶の政治的困難さに就いて、自分の見解を「大情況」

或いは「小情況」を踏まえて真摯に開陳する。

そこには空想論や理想論や建前論に堕さないリアルな「政治」が語られており、「究極の悪魔の兵器」を手にして仕舞つた、我々人類の最大の不幸が悲しみを持つて述べられている。そして、彼女の原爆詩朗読への讃歌を次の様にも送る。

貴女の本当の祈りでこれらの詩の眞実性を歌ひ出さねば、それは表理には達しない。だから貴女は詩の朗読といふ地味な仕事を続けてきたのではなかったか。その意味で貴女の朗読は、原爆詩に込められた思ひを甦らせやうとする「祈り」であり、「祈り」を通じて「表現」を追求する行為だったのでないでせうか。

この後、やおら攻勢へと矛先を転ずる。彼はこう言う。吉永の原爆詩を読むと言つた純粹で崇高な営為が、ある種の政治勢力に取つては、宛も彼らに絶好なる好餌を自ら投げ与えるかの様な情況を出現させて仕舞い、彼女が原爆の表

現の伝道者になったその刹那、彼の勢力の悪魔の手が必然的に有無を言わず強引な健やかさで付け入ってくる。

強引な健やかさで付け入られた彼女は、無力な者の声、一方的に傷つけられた者の声の伝達者であるが故に、寧ろ、その様な無力さを政治的に利用する者達に因つて、政治的な強者の立場を演じさせられ始める。又、原爆詩が、弱き者の声と言う形を借りた、特権的な場になって仕舞う事も、とも論じる。

再三に渡つて小川榮太郎の原文をそのまま引用したのだが、それは彼の言わんとする所を読者諸兄に正確に知つて貰いたい為の所行である。それは取りも直さず、私が小川の論に敬服した事でもある。彼の驚嘆す可き深い洞察力と、世の大勢に決して媚びない勇氣とが見るも見事なまでに横溢している最後の引用を許されし。

その時、貴女はあの類稀な女優としてでもなく、又、祈りの道を一人で歩む朗読者としてでもなく、核戦争の脅威への防波堤でもなく、単に国内政局の喧噪の中の、シンボ

ルとなつてしまふ。

最近であれば、安保法制反対の大合唱の中に、いや、その先頭に貴女の名前が絶えず持ちだされたのは記憶に新しい。

紙幅が尽き様としている。纏めねば。小川榮太郎は日本を代表する大女優である吉永小百合は、ある種の政治勢力に因つて「政治の魔の手」に付け入れられ、彼らに因つて「政治的な強者の立場を演じさせられ始めている」と、可成り同情的(?)且つ又、憐憫の情(?)さえ感じさせる書き振りであるのだが、私がつらつら考えるには、吉永小百合は十全にそれらを意識しており、寧ろ、主体性を持つて「反戦平和運動」なり「反核兵器運動」に、積極的に関つていと思う。

勿論、小川もこの一論の各所にその旨を濃密に漂わせ、皮肉極まりなく記してはいるのであるが、それが何とも絶妙の糖衣にべつとりと塗まぶされている為、余りどぎつさは感じられないのだ。だから、再三に渡つて書いている様に「誉め殺し」なのだが……。日本を代表する大女優と称されているだけに、彼女の影響力は限りなく大き

く、明らかに吉永に感化され、安保法制や護憲運動に対して発言する芸能人が数多く見受けられる。

私はそのいちいちにすべて眼を通した訳ではないが、その一部を読んだだけでも、首を傾けざるを得ないような陳腐な物言いが目立った。日本国は一般的に言つて、総ての人に言論の自由が保証されているのであるから、何をどの様に発言しても全く構わないのだが、発言したのであれば、その言のいちいちに渡つて己で責任を取らなければならぬ。有名芸能人であれば世間の注目は今更で、彼らは良く良く己の言動に敏感であらねばならない。

全く無名な者なら兎も角(無名であつても己の言には、絶対に責任を持つ可きとは思ふが……)、それでなくても有名と言つた事だけで、世間の数多くの人々に己が思つている以上に影響を与えて仕舞う芸能人などは、自らの言動に余程の覚悟がいるのである。政治と芸能——。恐らくそこには、いや間違ひなく、論ず可き壮大にして遠大な「闇国大系」が黒々として横たわっているのであらうが、如何せん私には、それを十全に語る可き知識も言葉も全く持ち合わせ

ておらない。唯々、己の不明を恥じるのみ——。

保守派の文芸評論家である小川榮太郎が、手紙形式にした吉永小百合宛の一文に、どんな形にしろ彼女が返書を送つた形跡はない。聡明で鳴る彼女の事だ。こんないやもん紛いの一文は、端つから無視するに限ると決め込んだのかも知れない。ではあるのだが、若し彼女がどんな形にしろ小川への反論を認めていたなら、私はそれだけで彼女を大女優と認めても良いとさえ思っている。私は決して吉永小百合の大ファンではないのだけれど……。

——了——

リドリー・スコット監督が 思い描く〈神〉とは

『プロメテウス』

久保嘉之

—

予め、お断りしておかねばならない。これから論じようとする『プロメテウス』は、甚だ不親切な映画である。物語の展開の上で、どうしてそうなるのだという必然に対する説明が、まずなされないのだ。既成の事実として、突然提示されるだけなのである。伏線も、当然ない。

「ではなぜ、そんな映画を取り上げたのだ」とお叱りを蒙りそうだが、敬愛する監督であるリドリー・スコットがこのところ〈神〉に関心を持ち出したのではないか、という思いが強くあり、一度折に

触れ言及してみたいと思っていたからである。それには恰好の素材であることは、確かなのだ。

もともと『プロメテウス』は『エイリアン』シリーズの五作目として、企画された作品であった。2000年代初頭というからジャン・ピエール・ジュネ監督による『エイリアン4』が公開されてから三〜四年経った頃ということになるうか。五作目の企画が持ち上がり、当初『エイリアン2』の脚本・監督をつとめたジェームズ・キャメロンが、エイリアンの起源を掘り起こす物語に取り掛かっていた。一作目を担当したスコット監督と、四作を通して主演したシガニー・ウィーバーも大いなる関心を表明、誕生の経緯を描くアイデアを支持したという。だがキャメロン監督は、20世紀フォックスが『エイリアンVSプレデター』の製作準備を進めていることを知り、企画を放棄してしまう。

「口の中から更に口が飛び出す愛すべき怪物をメインに使えなくなったのは痛い、折角の企画を没にしてしまうのは惜しい」と考えたかどうか、とにかくスコット監督は、ならば私が監督した一作目でほんのワンシーンだけしか登場しなかったが、ばかでかい操縦席の上で恰も宇宙船を操縦するが如き姿勢で発見されたため「スペースジョッキー」と呼ばれる人間によく似た半ば化石化した異星人、彼らの起源を探る流れでシリーズを継続したらどうだろうか。おそろくだがこの時スコット監督の脳裡に、〈神〉とは呼べぬまでも人間を創りだした存在としての彼らが、閃いたのではあるまいか。

ここでお断りを、もうひとつ。映画『エイリアン』の公開以降、本来は〈外国人〉を指す「エイリアン」という言葉が、〈宇宙人或いは異星人〉を表すものとして定着したのだが、これには〈知的生命体〉だけではなく、〈地球外のすべての生命体〉を含む意味が籠められてもいたのである。従って映画のタイトルを、単純に怪物を表現したもの、と解した人たちと、その怪物に滅ぼされた人間によく似た異星人を示すものと解釈した人たち……実に二通りの観方ができたわけである。だから『プロメテウス』では、怪物のほうを〈エイリアン〉、「スペースジョッキー」のスタイルで発見された異星人を〈エンジニア〉と使い分けている。

スコット監督はインタビュで次のように述べている。「映画は本当にタフで、本当に不愉快になるだろう。それは月のダークサイドだ。私たちは神とエンジニアについて話し合っているところだ。宇宙のエンジニアだ。そしてエイリアンは生物戦争のために創造されたのか？ それとも惑星を一掃する生物なのか？」

驚くほど高度な文明を持つエンジニア、彼らはなぜそのような文明を持ち得ることが出来たのか、彼らはどのようにして誕生したのか。——そして彼らはなぜ、人間を創造したのか？

二

出足で躓いた形の『プロメテウス』だが、とにかくエンジニアのルーツを探るという方向性が定まった上は、発端が『エイリアン』であるだけに、その前日譚を描こうということが決定された。だがこれも予算の関係等から修正を余儀なくされ、やがてスコット監督自身による訂正発言となるのだが、裏話的にちよつと面白い談話があつて、ジョン・スペイツによつて書かれた最初の脚本ではあまりに製作費がかかりすぎるため、コストダウンを図るべく脚本の改訂に送り込まれたデイモン・リンデロフが、

「本当の前日譚は本質的にはオリジナル映画の出来事に先行する必要があるが、本作は同じ世界を舞台とするものの、完全に何か異なり、異なったキャラクターが描かれ、そして完全に異なったテーマを持つている」と述べているのである。要するに前日譚ではあるが、『エイリアン』四部作とは、違う話の展開になると言っているわけだ。そのためシガニー・ウィバーの出演は見送られる。

本編である。冒頭、川を遡ると滝に突き当たり、上空には宇宙船が浮かんでいる。滝の上にフールド付のロープを纏った人間と思しき者が現われる。かの者はロープを脱ぎ捨てる。その下は筋骨隆々たる体軀であった。ただ頭髪はおろか眉毛も体毛もなく、ゆで卵の白身のようなつるつるな肌をしていた。かの者は容器に入った薬のようなものを取り出し、一息に飲み干す。その様子を見届け宇宙船は飛び去っていく。かの者はじきに苦しめはじめ、全身から血を噴き出し、足の骨は折れ、滝壺へと落ちていく。水の中で体は粉々に砕け、のみならず遺伝子さえも黒く変色し、ばらばらになってしまう。が、水と融合して蘇生したかのように、

遺伝子は再構築されていくのである。……これは何を意味するのだろうか？ 物語が進むに従いある程度の推測はできるのだが、それにしても、もしこれが人類が誕生する最初だとすると、随分おぞましい話ではないか。

時代は一気に飛んで2089年、スコットランドのスカイ島で、考古学者のエリザベス・シヨー（ノオミ・ラパス）は、同じく彼女の恋人でもあるチャーリー・ホロウェイ（ローガン・マーシャル・グリン）と共に、「星を指さす人間よりひとまわり以上大きな人物？を人々が崇めている」壁画を発掘。これはマヤやシュメールやバビロニア等で発見された同じ図柄の壁画より、千年以上古いものであった。

「捜しに来いといっている」強い予感に彼女は身震いする。「壁に描かれた絵は、人間を創造した人間によく似た生物からの招待状」だと彼女は確信していた。その生物を彼女は「エンジンニア」と呼んだ。——さてここでも、なぜ人間によく似た生物が人間を創造したとエリザベスが確信したのか、その理由は全く述べられない。

さらに四年後の2093年暮れ

から翌一月一日までが、メインとなる年代である。成程『エイリアン』より三〇年ほど以前になる。

「前日譚」の名残りであろう。果たしない宇宙空間を航行する探索船プロメテウス号。目的地は壁画に描かれていた、地球がある銀河系より遙か彼方にある別の銀河系で、地球と同じように月を持ち生命体の存在が可能な惑星（正式にはレクチル座ゼータ第二星系のLV1223と呼ばれる）。二年四月に及ぶ長旅は、ようやく終わりにさしかかろうとしていた。眠りが必要としないアンドロイドであるデヴィッド（マイケル・ファスベンダー）を除く全員が、コールドスリープ（冷凍睡眠）から目覚める。クルーのほか、監督官としてのメレディス・ヴィッカーズ（シャーリーズ・セロン）、地質学者に生物学者、そしてエリザベスにチャーリー。目的地に近付いたのである。

プロメテウス号でのミッションを企図し、莫大な資金を提供したのはウェイランド社の社長であるピーター・ウェイランド（ガイ・ピアース）であるが、メレディスはその娘。ミッションの表向きは「人類が抱く根源的な命題である、

人類の起源は？ 生きる目的は？ 死後は？」という謎を、人間を創造したエンジンニアに会って解き明かすことであつたが、その実ピーターはもつと切実極まる問題をかかえていた。老衰のため余命幾許もなかったのである。そのためクルーにも内緒でプロメテウスに乗り込み、エンジンニアと遭遇した時に冷凍睡眠から目覚めるようにしていた。「エンジンニアが人間の創造主なら、救世主でもあるろう。必ず私を死から救ってくれるに違いない」。それは生きたいという願いではなく、もはや生き抜くという執念であつた。

一方メレディスはミッションに強く反対していた。人は必ず死ぬ。自然の摂理である。厳粛たるその事実をなかなか受け入れず、為に社長の座を娘である自分に譲り渡そうとはせず、のみならずエンジンニアなる存在を捜し出して延命を図ろうとする父親の姑息さが、彼女には業腹^{ごうはら}だったのである。——ピーターはどうしてエンジンニアの存在を知ったのか。仮にエリザベスとチャーリーがエンジンニアを捜し出すための資金援助を申し入れたとして、いくら自分の死期が近いとはいえ、話を簡単に鵜呑みに

したりはしないだろう。まして当のエリザベスが、エンジンニアが人間を創造したという根拠はない、といっているのである。そう信じてるだけだ。

目的地である惑星を上空から探索中、チャリーが人為的な加工の跡がうかがえる幾つかのドーム状の岩山を見つけ、そのひとつのすぐ傍への着陸を指示する。待ちきれない様子で、すぐさま内部の調査。

三

以降の展開は『エイリアン』を下敷きになっている。前日譚ということもあるが、シリーズ四作を通して、この第一作目にしか、それもほんの僅かしか登場しないエンジンニアのルーツを捜すという物語なわけだし、そうせざるを得なかったのではあるまいか。というより、この『プロメテウス』は『エイリアン』シリーズの一本だということのアピールするため、意図的に似せたというくらいは仄々見えるのだ。そのためメイクだと囁かれることにもなるわけだ。

異なっている個所をピックアップしてみようと思うのだが、それには行動原理が不可解なデヴィッドの行動を追った方が、早道かも知

れない。なぜなら異なっている個所のほとんどに、彼が関わっているからである。

調査すべく入ったドーム状の岩山（実はエンジンニアの宇宙船）、初めての筈なのにデヴィッドはすぐにドアのスイッチを探しあてたり、エンジンニアのホロスコープを現出させたりできたのは——なぜ知っている？

死後二千年を経過していると思われるエンジンニアの切断された頭部をプロメテウス号に持ち帰りスキャン、その結果外骨格と思われるものがヘルメットであることが判明。デヴィッドが短い象の鼻のような部分を持ち上げボタンらしきものを押すと、ヘルメットは簡単に外れた——どうして判った？

現れた頭から採取したDNAを検査すると、驚くべきことに人間のものと全く同じ構造であった。

また人知れず運び込んだ、中央が膨らんだ円筒から取り出した黒い人の爪の先のようなものを、それが何かおそらくデヴィッドは判っていないが、酒に混入させチャリーに気付かれないように飲ませる。そのチャリーと愛し合っていたエリザベスの、先天的に決して児を孕むことのない子宮内に、エ

イリアンの幼体（チェストバスター）が宿るのである。その幼体をエリザベスごと冷凍睡眠させ、地球へ連れて行こうと企てるデヴィッド。——誰かに命じられたわけでもなさそうなのに、どうしてそんなことをする必要がある？

エリザベスは一瞬の隙をついて看守を殴り倒し、ハイパー手術用の医療ポットを操作して、何と自らの手で幼体を取り出してしまうのである。取り出された幼体も気味悪かったが、取り出す行為そのものがもつとグロテスクであった。暴れ回る幼体を手術室に閉じ込めて、彼女は逃げ出す。それはいいが走るのだ、ジャンプするのだ。開いたお腹をホッチキスで縫いとめた体で。呆れて、不可能だろ、思わず突っ込みを入れてしまう。監督もう少し現実味のある展開にしてみませんか。

エリザベスが逃げ込んだ部屋にはピーター・ウェイランド社長と、その世話を焼くデヴィッドがいた。この時点でエリザベスは、エンジンニアはすべて自らが造り出したエイリアンに滅ぼされてしまった、そう思い込んでいた。だがデヴィッドの口から意外な言葉が吐かれる。「ひとり生きて今から会う

ところですよ」。そのためピーターは冷凍睡眠から目覚めたのだ。二人ほどの側近と共に、エリザベスも同行を余儀なくされる。

デヴィッドの説明は続く。だがそれは意外さを通り越して驚愕すべきものであった。エンジンニアは人類を絶滅させるべく地球へ向けて飛び立つ寸前、エイリアンのために滅ぼされたのだと。——これで幾つめの疑問になるのか、デヴィッドはどうしてそんなことを知っている？ ここまでくると単なる御都合主義では済まされないレベルである。

長期睡眠装置（これは人類の冷凍睡眠装置とは別物のようだ）を解除され、起き上がってきたエンジンニアに、エリザベスは叫ぶ。「私たちが（エンジンニアに）何をした。なぜ憎むの？」。デヴィッドは通訳を試みようとするが、突然狂暴化したエンジンニアに首を引き抜かれてしまう。ピーターや他の側近は、みな殴り殺されてしまった。おそらくだが、言葉は理解できないまでもエリザベスの剣幕に、人間を滅亡させようとしている計画を知られたと思い、猛り狂ったのではなからうか。まさかピーターが延命を乞うために会いに来たとは、

考えもしなかったであろう。もしピーターの目的を知っていたら、その大いなる皮肉にエンジニアは苦笑したに違いない。

ただひとり逃げ出したエリザベスに、首と胴体が別々になったデヴィッドから通信が入る。岩山に見えたのはエンジニアの宇宙船で、彼はエイリアンの卵をばら撒くため地球へ向かうつもりだと……

エリザベスはヤネック船長(イギリス・エルバ)に、地球の人類が滅ぼされかかっていると訴え、エンジニアの宇宙船を止めて欲しいと懇願する。「戦闘が無理なのは判っている。でもあの宇宙船を止めないと、私たちの帰る地球が亡くなってしまう」。船長ほかチャンス(エミュー・エリオット)とラヴェル(ベネディクト・ウォン)航海士の三人は、瞬時に意を決すると何の躊躇いもなく、今まさに飛び立とうとしている宇宙船に、プロメテウス号を衝突させるのである。この辺り、人間の意気地と尊厳を賭けた見所のはずなのだが、エンジニアが人間を滅亡させようとしているという事実が突然提示された後で、観客である私は戸惑っていただけに、いまひとつ盛り上がらないままで終わった。惜しい。

四

本編のタイトル及び探索船の船名に用いられた、プロメテウスとは。古代ローマ時代のギリシアの著作家であるアポロドーロスによると、プロメテウスは人間を創造したギリシア神話における「神」であるという。また、天地創造の力を持つ「神の焰」を未熟極まる人間に渡すことは、身の丈に合わぬが故にどんな恐ろしい結果を招くかも知れず、為にゼウスから固く戒められていたにも拘らず、禁を犯して天界から火を盗み、人類に与えた。それによりプロメテウスは神の座を追われ、のみならずカウカソスの山頂に磔にされ、三万年の長きに亘り毎日鷲に肝臓を啄まれる劫罰(うぢば)を受けることとなる。もしそこに何らかの寓意を求めるとするなら、プロメテウスはエンジニアで、神の焰とでもいうべきエイリアンを造り出したか培養したがため、神の座を追われた、ということにでもなるのであるうか。

いったい「神」というのは何なのだろう? エリザベスがいいう「エンジニアを創ったのは誰?」それが神なのか。

本編の中にその手懸りがあると

すれば、それはエリザベスがいっても肌身離さず付けている、十字架のペンダントであろうか。エボラ出血熱で亡くなった父親の形見。チャーリーと愛し合うまえ、彼から、「(エンジニアが人間を創ったのがはつきりした)この期に及んでも、まだ神を信じてるのか」と

からかわれ、またラスト近く首だけのデヴィッドから、「(人間を創造したエンジニアがその人間を滅亡させようとしている)こうなっても神を信じるのですか」と呆れられる、信仰心としての証である十字架である。但しこれは普遍的な意味での神ではなく、エリザベスが信じる神についてのエピソードだと、限定しなくてはなるまい。しかしながら、もしかして最初に取り上げたインタビューでスコット監督が語った「私たちは神とエンジニアについて話し合っている」、その映像的表現だとすると、スコット監督の神についての見解の一部を垣間見たとは、いえるかもしれない。

撃墜された宇宙船から脱出したエンジニアが、エリザベスを襲うためプロメテウス号の残骸へ向かって走る。間一髪エリザベスは、閉じ込めた手術室の中で巨大化し

たエイリアン(これは全くでっかい蛸にしか見えない)と、エンジニアを対決させることに成功。熾烈な争いを繰り広げる双方ごと、やっとの思いで再び手術室の中へ閉じ込めた彼女は、

「今更ですが私を助けて下さい。宇宙船はもう一隻あります。私はその場所を知っています。操縦することも出来ます、あなたには私が必要な筈です」というデヴィッドの願いというか提言を聞き入れ、首と胴体ふたつになった彼の身体を回収して、残された宇宙船へと向かう。——このシーンもどうしてデヴィッドが宇宙船の在処や操縦法を知り得たのかという(へ?)がつくところだが、些か食傷気味。目的地は地球ではなく、エンジニアたちが住み暮らす星。

エリザベスはいう。「彼らは人間を創り、そして滅ぼそうとした。なぜ考えを変えたのか、その理由を知りたいの」

——エンジニアの最後のひとは、遂に自ら造りだしたエイリアンの餌食となった。やがてエンジニアの腹を食い破って現れたのは、口の中から口が飛び出すあの「愛すべき」エイリアンであった。

追悼・今市文明さん

関田孝正

本誌常連執筆者である今市文明さんが、平成二十七年十一月九日、満六十七歳でこの世を去りました。ご冥福をお祈りいたします。

昨年、本誌に「昭和の大スター高倉健を悼む」との一文をご執筆いただきましたが、今度は今市さんご本人を悼むことになってしまいました。残念でなりません。

昨年の本誌では、次のような近況を綴ってくれました。

「去年の秋まで一年半の入退院を繰り返してようやく復帰。自宅療養を続けていますが、長い入院生活による体力の低下はいかんともし難いものがあります。でも、何度も臨死状態に陥りながら幸運にも生還したのですから、その与えられた命を大切に、少しずつ回復をめざしたいと思っております。みなさんとともに、また「シネマ気球」に参加できたことをとてもうれしく思います。」

今市さんは10年位前に腎臓を患い、人工透析の治療を一日おきに受けていました。治療には時間がかかり、その間はDVDを見ているか本を読んでいるしかないと言っておりました。通常の生活をお

くれるのは治療日以外の四日しかなく、そのサイクルに合わせた生活之余儀なくされておりました。それでも仕事をし、ときには家族旅行を楽しんでいたようです。近年は腸に潰瘍ができて、健康体であれば手術が可能なのですが現状では自然治癒で治すしかないとの医師の見立てに従い治療に専念してがんばっていました。

私は三十歳目前の1978年に寝具関係の業界新聞社（十人ぐらいの会社）に入社、そこで今市さんとお会いしました。

私は記者の仕事は初めて。ふとメンバー、問屋、小売店などが取材先。今市さんから取材、原稿書きなどの仕事をいろいろ教えていただきました。今市さんはそれまで百貨店や着物の専門誌などで豊富な経験を積んできたベテラン記者でした。

会社は8〜10頁建の旬刊紙、年に2回はカラータブロイドの特集号や縮刷版、業界ガイドブックを出したりで、スケジュールはわりとハードでした。

社員はみんな酒が好きで、仕事が終わると会社のあるビルの一階の居酒屋「小伝馬」で、おだをあげる日々でした。問屋は、春と秋に小売店向けに展示会を開催していました。高度成長経済の時代はお車代という交通費が出たというので

すが、私が勤めた頃は低成長経済の時代で、そんな習慣はなくなっていました。問屋の取材では食事が出ることもありましたが、ある問屋（あまり取材に行かない会社でした）では、普通は遠慮してそこそこの料理を注文するのですが、そのときはさもしいと思われてもかまわないとの思いで（担当者もおらず食券を自由に使えた）、いちばん高いサーロイン・ステーキ（今ではどうということはないと思うのですが、当時は高価な食べ物）を今市さんと食べてしまいました。二人とも（少なくとも私は）後ろめたい思いでその場を後にしたことを覚えています。会社の近くで秋にはべつたら市（べつたら潰けの店がたくさん出る）が開かれます。そこで飲んだ樽酒がうまかったことを思い出します。

当時「ブロックくずし」や「インベーター」などの卓上ゲームが流行っていて、われわれは編集部長、次長とともに、それにはまったこともありましたが、昼休みは千円札を百円玉に両替してもらって（1回百円）ゲームに興じました。

ある五月の連休には奥様が子供さんと帰郷して今市さんは「独身生活」となり、ゲームを喫茶店で堪能した後、今村昌平の「復讐するは我にあり」につきあったこともあり、今市さんは、正月には

奥様と「寅さん」を見に行くのが恒例の行事だと言っておりました。生れは鳥取のハワイ（羽合と書く。冗談かと思いましたが本当です）。山梨の都留文科大学で奥様と知り合い、町にある映画館では東映のヤクザ映画をよく見たそうです。

私はその会社には7年余勤めました。後に今市さんも会社を辞めフリーの立場で寝具業界の問屋の情報誌をつくったり、老人クラブの雑誌に記事を書いたりするほか、能弁を活かして、元気な老人のことや好きな映画についての講演会活動などをしていました。業界新聞社退社後も月に1回程度、北千住の大衆酒場「永見」で仕事がてらお会いして、一緒に飲んでいました。

「シネマ気球」へは、第10号（1989年）からご参加いただきました。2008年には今市さんが書きためた原稿をもとに「人生は映画とともに」を上梓させていただきました。

お通夜の会場では、お好きだった映画「太陽がいつぱい」のテーマ曲が流れていました。映画のチラシのコピーがたくさん貼ってありました。

いろいろお世話になりました。楽しい思い出をたくさんありがとうございます。お疲れさまでした。安らかに眠りください。合掌。

■筆者の近況等■(順不同)

関口健一Ⅱ入院中・療養中には映画館へ行って見られなかった数々の映画も、DVDやWOWOWで次々に見えています。古い映画であるけれど「007」ゴールドフィンガーⅠが見やすく作られた映画だと思った。カットが登場人物の誰かの目線で撮影しているから、見ている人も映画の中にいるような感覚だった。たぶん、小型カメラがない時代。ボンドカーのクラッチのアップのカットは、どうやって撮影したんだろう?と想った。ゴールドフィンガーⅠの家の仕掛けにも驚いた。

堀江広子Ⅱ最近身近な野鳥などに対して思わず敬語が口について出るようになりました。自宅近くの川べりにはさまざまな鳥が棲んでいます。おなじみのスズメやカラスの他に、珍しいカワセミ、ムクドリ、ヒヨドリ、ツバメ、川鶺鴒、シラサギ、アオサギ、アイガモ、カワラヒワ、メジロ、ウグイス、モズ、セキレイたちの姿が目にとまり、誰が教えたわけでもないのに上手に生きとんさる(生きていらつしやるの意)なあと思わず尊敬の念が湧いてきます。自然はしばしば牙をむくこともあるけれど、それぞれが固有の美しさを持っていると感じる毎日です。

中田好美Ⅱ原作、映画と面白かった『舟を編む』のアニメ放送が待

ち遠しいです。10月からフジテレビで放送開始だそうです。

押切令子Ⅱこのところ、高齢の母につきあつての平和な日本映画や、イタリア語会話の勉強を兼ねてイタリア映画をよく見えています。でも一度見ただけでは、とても皆さんが書いていらつしやるような深みまで読み取ることはできず、まして文章にするなど遠い話でした。なので、古い映画ですが大好きなリヴァー・フェニックスが地味な役で出ていた「殺したいほどアイ・ラブ・ユー」を選定。DVDを借りに走りまわりました。原稿を書くにあたり何度も見直して、改めてそのおかしさに笑われました。何といつても一番はウィリアム・ハート。彼の渋さや格調高さを捨て切つての名演技でした。

藤井陽子Ⅱ2月半ばにお世話になつている方から強烈にプッシュされて遂にFacebookを始めました。毎日のように描いているイラストを日々投稿し、いいね!やコメントを頂いています。そのやりとりがきっかけでつい最近、生まれて初めての「なんちゃって絵本」を描きました。Facebookでは絵や動物など大好きな世界だけでなく、難しい政治の分野も日々飛び交つていて、詳しい人達から色んな事を勉強させて頂いています。Facebookは自分にとつて今のところとても有意義です。

久保嘉之Ⅱ仕事であるタクシー業務は、このところ下降気味ではあります。近くにある蓮沼海浜公園に、昨年世界最強と謳つたウォータースライダーが出来、連日賑わいました。今年もたくさんの方が来てくれると有難いのですが。どうですかあなたも一度おいでになつてみては――

門馬徳行Ⅱ大河ドラマ『真田丸』のおかげで戦国武将たちの運命に興味を持ち始めた。当時は相手に忠誠を誓うために身内を人質として差し出していた。息子や娘、さらに母親までも送り出した。さらに政略結婚など日常茶飯時、ここに天下を取るための血なまぐさいドラマが数多く生まれた。その中でも信長・秀吉・家康をめぐる戦いは、最近になつてわかつた真実もあり興味が尽きない。

里中智子Ⅱ毎日暑い日が続きますが、そろそろ先も見えてきたので今後の役に立つような何かを始めてみたいなど思っています。どうなりますやら。

岩館範子Ⅱ今、海外ドラマをよく観ています。昔と違い映画で名前を知る俳優がたくさんで、有名監督がプロデュースする作品もあります。ノーマン・リーダス出演の『ウォーキング・デッド』はゾンビものの、マッツ・ミケルセンがレクター役の『ハンニバル』

スケールの大きい『ゲーム・オブ・スローンズ』はショーン・ビーンが主演しています。『X-ファイル 2016』が13年ぶりに復活したので早く観たいです。ギレルモ・デル・トロが参加する『ストレイイン』も気になっています。

鶴田聖Ⅱ大学時代のサークルの後輩の杉田くんが、一年余の闘病の末、この七月に白血病で世を去りました。今回のイラストは、彼の全快を願う意味も込めて制作を進めてきたのですが、願い叶わず、鎮魂の点描となつてしまいました。山下雄平Ⅱ来年(2017)の個展の準備で、油絵を描きためています。昨年の初めての個展は、画廊として去年一番盛況だったと、先日画商さんから知らされ、2度目の個展に励みになるとともに、良い意味プレッシャーを感じています。商売と作画の原動力は何といつても、休日の映画鑑賞ですね。関田孝正Ⅱ大学のOB会でまたま隣り合わせた先輩は、少林寺拳法の先生だった。その縁でシニア向けの健康保持と護身術のためのクラブに週2回通うことになった。その先生は映画をしばらく見ないと禁断症状が起るといふ熱烈な映画ファンだった。次号での登場をお願いしてみます。

◇

◇

◇

「ヘイトフル・エイト」(監督Ⅱク
エンティン・タランティノー)
風吹の山小屋で展開
する密室ドラマ

南北戦争(1861~1864)後の西部。雪の山道を馬車がゆく。乗客は、賞金稼ぎジョン・ルース(カート・ラッセル)と彼に捕らえられ手錠を掛けられたお尋ね者の女デ이지・ドメルク(ジェニファア・ジェyson・リー)。賞金をもらうために町へ連れていくところだ。女は絞首刑になる凶悪犯らしい。ジョンに口答えしては肘鉄をくらい痛めつけられ片目にあざをつくっているが、めげそうにもないふてぶてしさがある。女を奪還するために仲間がやってくるかもしれないとジョンは身構えている。このお尋ね者は生きていても死んでいても賞金は同じ。だったら死んでいた方が逃げられる心配はないし奪還される恐れもないので運びやすいのでは? が、ジョンは生きたまま女を護送する。賞金稼ぎの美学か。

人物として登場。
ジェニファア・ジェyson・リーは、「黙秘」(監督Ⅱテイラー・ハックフォード、1995)で、母親(キャシー・ベイツ)が父親を殺したのではないかとの疑惑を抱きつづけ、その精神的苦痛から逃れるために葉中毒になってしまう心に傷を負った女を好演した。今回は、運つ葉だが本当に悪党なのか底の知れない変な女を演じている。雪の降りしきる山道で黒人マキス・ウォーレン(サミュエル・L・ジャクソン)に遭遇する。この男も賞金稼ぎだ。黒人解放宣言を出した大統領リンカーンと親しく、文通していたことがあるという男だ。大統領からのものだという手紙を持っている。ただこの男、南北戦争で北軍・南軍にかかわらず白人を大量に殺した過去をもつ。人種差別の裏返しを思わせる。サミュエル・L・ジャクソンはタランティノー映画の常連。タランティノーは前作「ジャンゴ 繋がれざる者」(2012)で黒人のガンマン(ジェイミー・フォックス。レイ・チャールズを演じた「Ray」/レイ「2004」でアカデミー主演男優賞)を主人公にして派手に白人の悪党どもを射殺した。「ジャンキー・ブラウン」(1997)では、子供の頃からフアンだった黒人女性バム・グリアをヒロインに抜擢した。人種差別は吹き飛ばせという気概がタランティノーにはあるのだろう。

もう一人、町で保安官になるという男クリス・マニックス(ウォルトン・ゴギンス)を拾う。この男も胡散臭い。山賊の成り上がりのような人物だ。当時、保安官は誰も彼も正義の人であつたわけではないようだ。山の中、それも雪山で二人の男に遭遇する偶然性は低い。ジョンは当然ながらデ이지の仲間ではないかと疑う。御者を含めた馬車の一行は吹雪の中、山の中の服飾店(とは名ばかりの山小屋。食堂やバーも兼ねている。料理はシチューのみ)で一泊することになる。そこには4人の男がいた。メキシカンの使用人ボブ(デミアン・ビチル)、絞首刑執行人オズワルド・モブレイ(ティム・ロス)、元南軍の將軍サンディ・スミザーズ(ブルース・ダニン)、無口なカウボーイ(マイケル・マドセン)がいる。

マイケル・マドセンはタランティノー組。ブルース・ダニンは、「ブラック・サンデー」(監督Ⅱジョン・フランケンハイマー、1977。脅迫状により公開中止。その後ビデオ化)でテロリストを演じたが、4年後には「ネブラスカふたつの心をつなぐ旅」(監督Ⅱアレクサンダー・ペイン、2014)で毫碌しかかっている頑固親父になっていた。ティム・ロスは「海の上のピアニスト」(監督Ⅱジュゼッペ・トルナトーレ、1999)で客船で一生を終える印象的な主人公を演じた。黒人の賞金稼ぎマキスはこの店や主人のことをよく知っている。メキシカンの使用人の話だと女主人は出かけているとのことだ。しかし、女主人はメキシカン嫌いのメキシカンに店を任せて出かけるはずがないといぶかる。ジョンはこのなかにデ이지の仲間がいるに違いないと考え、すべての銃を押収する。マキスは元南軍の將軍が黒人殺しの有名な人物であることを知っていた。差別主義者と白人に怨みをもつ黒人がひとところにはいたらどうなるか。ここでも人種差別の問題が一触即発の危機をおおる。食事の時間になりみんなシチューにありつく。デ이지も手錠を外され、ギターを弾いたりしてくつろいだ雰囲気になる。即興演奏風に自分が自由の身になるような歌詞を口ずさみジョンを怒らせてしまう。風吹にさらされた山小屋に扉の掛け金はなく、板を釘で打ちつけている。出入りのたびに、扉を蹴破りまた板を釘で打ちつけないければならない。なぜそうなのだろうか。床の板の間に菓子がごろごろしている。これは何? スタジオでの撮影は、風吹の山小屋の寒さを表現するために冷凍庫のような環境の中で行われたという。吐き出される白い息が凍りつくようだ。美術は「キル・ビル Vol.1」(2003)も担当した種田陽平。ドラマはその日の昼へ。空は晴れている。さて、どうなる——。(関田 孝正)